

宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の大木 6 式土器

小林圭一

1 はじめに

縄文時代前期末葉十三菩提式期の関東地方は、零細な遺跡が散在した状況が見られ衰退期（人口減少期）を迎えていたのに対し、時間的に対応する大木 6 式期の東北地方の中・南部¹⁾では、遺跡数が増加し繁栄期にあったことが指摘されている（今村 2010:459-465 頁）。それ以前の当該域の前期後葉（大木 3～5 式）²⁾は遺跡数が少なくなっており、表向きは末葉になって回復したように見受けられる。しかし大木 6 式期の遺跡が一律に安定的に継続していた訳ではなく、詳細な編年研究に照らしてみると、存続期間の長い遺跡は岩手県南部と宮城県北部、即ち北上川中・下流域と南三陸沿岸～松島湾の沿岸域に集中しており、他の地域の遺跡では大木 6 式の時間幅の中でも激しい消長を辿った様相が観察される。

前期末葉は東日本の地域間の交流関係が劇的に変化した時期と想定されており、特に日本海沿岸部では大木 6 式 3 期以降に、石川県・富山県方面の北陸集団が海岸伝いに秋田市付近まで進出し往還していた状況が指摘されている（今村 2006a・b）。また東北の内陸部でも広汎な土器情報の伝達と人的交流が行われていたと推定されている。そして中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期には南西関東や中部高地で人口が増加し繁栄期を迎えていたのに対し、同時期の東北中・南部では対照的に遺跡や遺物が極端に少なく、住居跡の検出例もなくなるなど一時的な衰退期にあり、続く大木 7a 式の竹ノ下式並行期になって回復したと考えられている（今村 2010:464-465 頁）。関東と東北では上記したように衰退と繁栄の経過にタイムラグが存するが、大木 7b 式・阿玉台Ⅰa 式期には共に安定と繁栄を背景とした中期社会に移行しており、それぞれに有力な地域圏が形成されるに至ったと考えられる。

筆者はこれまで、山形県の庄内・村山・置賜地方と福島県の会津地方の四つの地域について、今村啓爾氏の大木 6 式土器の 5 細分編年に準拠して、土器型式の変遷

過程と地域社会の在り方を考察してきた（小林 2014・2016）。その結果大木 6 式中段階の 3 期を境に、山形県の日本海沿岸部（庄内地方）では北陸方面の影響の増大、内陸部（村山・置賜地方）では大規模遺跡の衰退や遺跡数の減少、福島県会津地方では沼沢火山の噴火の影響による遺跡数の減少と日本海沿岸部との交流が杜絶した可能性を指摘した。東北中部の太平洋側（岩手県南部・宮城県北部）が縄文前期後葉～中期初頭にかけて長期的に継続した大規模な遺跡が多いのに対し、東北部の遺跡は一般に時間幅が限定され、長期にわたって営まれた遺跡が少ない傾向が見られ、大木 6 式の 1 型式の範囲においても、安定した生活が営まれていた訳ではなかったと考えられる。その中で例外的な遺跡が、宮城県南部のこやながわ小梁川遺跡、山形県置賜地方の台ノ上遺跡、福島県浜通りの浦尻貝塚、同県会津地方の法正尻遺跡^{ぼうしやうじり}で、いずれも前期末葉から継続し中期前葉～中葉にかけて大規模な拠点集落へと発展したが、上記したように五領ヶ台Ⅱ式並行期の衰退を経て繁栄期を迎えたと推定されている。

本稿では縄文時代前期末葉の地域研究の一環として、阿武隈川水系の小梁川遺跡出土の大木 6 式土器を検討し、宮城県南部における地域的特性の明確化に努めてみたい。同遺跡は近接した大梁川遺跡を含めると中期を通して規模の大きな集落が営まれていたが、その形成が前期末葉に開始され、大木 6 式 1～5 期と中期初頭の土器が連綿と出土した数少ない遺跡となっている。これまで筆者が検討した隣接地域との差異も想定されることから、小梁川遺跡出土の大木 6 式土器を整理することで、往時の地域社会を理解するための一助としたい。

2 大木 6 式土器の編年

大木 6 式土器は縄文時代前期の最終末に位置づけられる土器型式である。東日本の前期末葉～中期初頭の編年研究を牽引する今村啓爾氏の大木 6 式 5 細分編年（今村 2006c）に準拠して、筆者はこれまで山形県内と福島県会

表1 今村啓爾氏による前期末～中期初頭の編年（今村2006・2010）改変

	北 陸	中部高地	西 関 東	東 関 東	東北中・南部	東 北 北 部
前 期 末	蜆ヶ森Ⅱ	諸磯c(古)式	諸磯c(古)式	興津Ⅱ式	大木5a式	
	蜆ヶ森Ⅱ	諸磯c(新)式	諸磯c(新)式	粟島台式	大木5b式	
	鍋屋町式 第1段階	十三菩提式 古段階前半	十三菩提式 古段階前半	粟島台式	大木6式1期 (古段階)	円筒下層c式
	鍋屋町式 第2段階	十三菩提式 古段階後半	十三菩提式 古段階後半	粟島台式	大木6式2期 (古・中段階の間)	円筒下層c式?
	真脇式	十三菩提式 中段階	十三菩提式 中段階	下小野式	大木6式3期 (中段階)	円筒下層d1式
	朝日下層式	松原式	十三菩提式 新段階前半	下小野式	大木6式4期 (新段階)	円筒下層d1式
	新保式 上安原段階	踊場式	十三菩提式 新段階後半	下小野式	大木6式5期 (新段階)	円筒下層d2式
中 期 初 頭	新保式 第Ⅱ段階	踊場式	五領ヶ台Ⅰa式	五領ヶ台Ⅰa式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅰ並行 (大木7a-Ⅰ)	円筒上層a1式
	新保式 第Ⅱ段階	踊場式	五領ヶ台Ⅰb式	五領ヶ台Ⅰb式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅰ並行 (大木7a-Ⅰ)	円筒上層a1式
	新保式	踊場式	五領ヶ台Ⅱa式	五領ヶ台Ⅱa式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅱ並行 (大木7a-Ⅱ)	
	新保式	五領ヶ台Ⅱb式	五領ヶ台Ⅱb式	五領ヶ台Ⅱb式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅱ並行 (大木7a-Ⅱ)	
	新保式	五領ヶ台Ⅱc式	五領ヶ台Ⅱc式	五領ヶ台Ⅱc式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅱ並行 (大木7a-Ⅱ)	
	新崎式	大石式	竹ノ下 大石式	竹ノ下式	本来の大木7a式 (大木7a-Ⅲ)	

(網点は本稿の時間的範囲を指示する)

津地方の大木6式土器の変遷を概観してきた。同氏の東
北南部の大木6式編年については既に拙稿(小林2016)
で図版を含め紹介したので、本稿では概要のみを記すが、
前後の型式を追記した。小梁川遺跡から出土した土器は
同氏の大木6式5細分編年の重要資料として、最も多い
22点が取り上げられている(今村2006c)。

大木6式は球胴形と長胴形の土器を主体に構成される
が、この区分は大木6式が成立する時期はそれ程明瞭で
なく、2期以降に分化が進行する。それぞれ北部(岩手
県・宮城県北部)と南部(宮城県南部・山形県・福島県)
を中心とした地域差が存するが、北部では長胴形と球胴
形の文様が類似し、特に長胴形に装飾が多く、変化を追
跡しやすいことから、この系列を基本として5期に分期
し、これに球胴形土器や南部の諸系統を対比させ、並行

関係を示している(表1)。

大木5式 口縁部が外反した円筒形または植木鉢状の器
形で、縄文地にジグザグの貼付文と口部の鋸歯状装飾体
に特徴付けられ、年代的に5a式と5b式に二分されてい
る(興野1969)。先行する大木5a式は口部の鋸歯状切
り込みが大型で鋸歯数は少なく、ジグザグの貼付文は体
部に幅広く数段にわたって付される傾向が見られる。こ
れに対し後続する大木5b式は鋸歯状装飾体が口周に広
がり始め、鋸歯数は多くなるが、鋸歯自体は小刻みとな
る。文様は区画線の発生により、ジグザグ文が頸部に圧
縮され、段数も減少し、貼付文から沈線文に漸次変化す
る。頸部文様帯は上限を刻みのある浮線文1本、下限を
刻みのない細い浮線文1本ないし数本で画するものが普
通で、下の区画線は沈線が用いられることが多いが、上

限の刻み浮線文は沈線化しないことが多く、大木6式頸部の刻み隆起線につながる（今村2006c：39頁）。

大木6式1期 長胴形と胴下部が縮約し球胴形に向かう形の違いがより明瞭になってくるが、まだ完全な分化とは言えない。全体的に文様が少なく、頸部で強く外折する器形や、その括れ部を水平に回る刻みのある隆起線（結節浮線になるものもある）が特徴的である。球胴形は口縁部文様帯が未発達で、頸部の括れの下に浮線文からなる幅の狭い文様帯を有し、長胴形は頸部・胴部文様帯が振るわない傾向が指摘される（今村2006c：42-45頁）。

大木6式2期 長胴形と球胴形の分化はまだ不明瞭で、長胴形でありながら胴部の膨らみが強く、判断しにくい例も存する。球胴形は底部近くが縮約し再び開くものと、胴部から円筒状の脚台状部への移行が緩やかなものがあり、括れ部直下には結節浮線文が用いられ、文様が発達する傾向が見られる（今村2006c：59頁）。長胴形は口唇部の隆帯とその下の隆帯の間を円形の貼付文や数本の隆起線で装飾的に結ぶなど、口縁部が複雑化しており、北部における変化と軌を一にし、双頭波状口縁が発達する。また隆起線による立体的な装飾が特徴的で、隆起線の中心線に沿って撚糸を押し付けたものが、山形と会津に認められる（今村2006c：51頁）。

大木6式3期 長胴形と球胴形の2種類からなる組成で、この時期に「浮線文系球胴形土器」が最も発達する。球胴形は外反する口縁部、球状に膨らむ胴部、円筒形の台状部の3段からなる器形で、結節浮線文、ソーメン状浮線文、結節沈線文等の文様表現で飾られたものが多い（今村1985：111頁）。口縁部の幅が広がり、その上の文様が発達し、胴部文様帯の幅も広がりが見られ、下限は胴径最大部付近に達するものが多い（今村2006c：59頁）。長胴形土器は北部と同様の口縁部文様（中太の沈線で複雑化した文様）を有するが、胴部文様を欠く土器が多い（今村2006c：54頁）。

大木6式4期 球胴形と長胴形で組成されるが、球胴形は口唇が内外に突出した断面を有するものが多く、胴部文様帯は狭くなり、帯をなさない懸垂文になるものもある。ジグザグは短い浮線の端を重ねるようにしたもの（端重ねジグザグ）が特徴的で、胴部は羽状縄文を縦に配したものが大部分となる（今村2006c：62頁）。長胴形は北部と同様に口縁部文様帯（複雑化した文様が単純な形

に整理される）を有するもの他に、口縁に浮線文系球胴形と類似の文様を有し、胴部は縄文だけになる円筒形の土器が見られる（今村2006c：54頁）。頸部文様帯では刻み隆起線からの変化とみられる竹管外面による押し引きが特徴的で、1本の場合が多いが数本重ねるものもあり、他に平行沈線を重ねるものもある（今村2006c：50頁）。

大木6式5期 長胴形と球胴形の文様上の区別がなくなり、胴部が球形に膨らむかどうかだけの区分となる。球胴形の器形は球胴部分が収縮し、台状部が太く高くなり、球胴形というより口縁部の下が膨らむという表現が当てはまる。また4期と同じく口唇の断面形が内外に突出するものが多く、更に複雑になって内側では階段のように1段低い位置から突出するものが見られる。文様は浮線を2本平行に貼り付けて文様を描き、その2本を短い浮線で梯子形につなぐ梯子形文様やドーナツ形貼付文に刻みを入れた文様が認められ、口縁部文様帯の下限をわずかな隆起線で画するものが多く、大きな橋状把手も用いられる（今村2006c：58・62頁）。

中期初頭 五領ヶ台I a式と同I b式並行期の土器が相当する。前者は大木6式5期との近似性が強く、器形的には胴部下半の円筒部分が太さを増し、文様では浮線文による表現を沈線文に置き換えたのが五領ヶ台I a式並行期で、短沈線を並べた梯子形の文様図形を特徴とする。大木6式5期ではドーナツ形文様部分が独立であることが多いのに対し、五領ヶ台I a式並行期では周囲の文様の中に埋め込まれ、渦巻きの端が斜めタスキに流れ込む傾向が見られ、文様の空白部の削り取りであった三角形が、沈線に沿って機械的に並べたものが現れ、口唇外側を厚くし、縦線を刻むものが増える（今村2010：361頁）。胴部には縦方向の縄文が加えられるのが普通で、羽状に組まれたり、両端に結節回転文が加えられる（今村1985：97頁）。

五領ヶ台I b式は細線文を地文として用いるようになり、その上にI a式からのドーナツ形や斜めタスキなどの文様図形を沈線で描き、三角形の刻文を加える。しかし細線文が卓越するのは南西関東で、東北ではあまり普及しておらず、I a式並行期とI b式並行期の区分は必ずしも明確とは言えない（今村2010：363頁）。

中期初頭の東北中・南部に特徴的に見られるのが、「糠

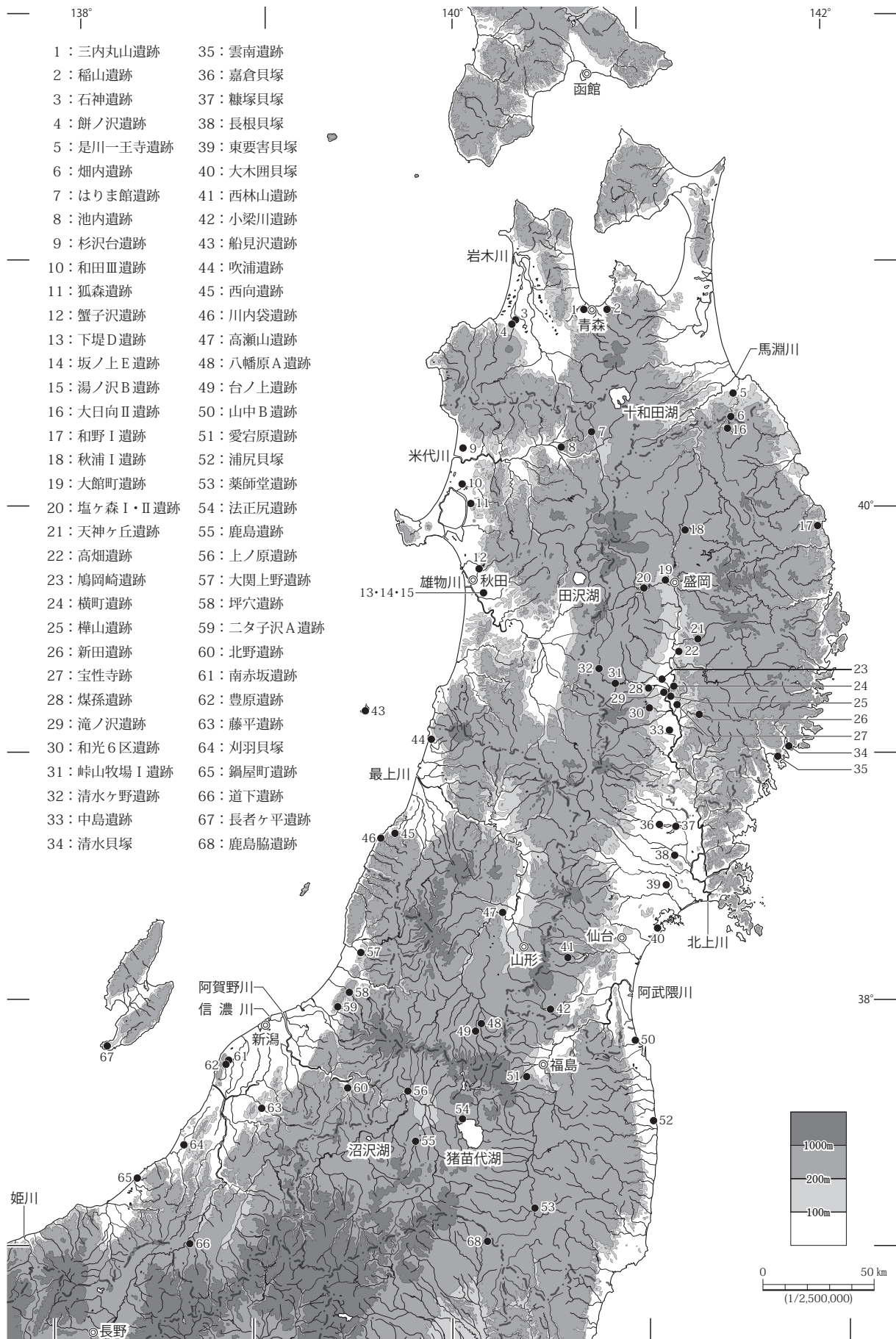


図1 東北地方の縄文時代前期末葉～中期初頭の主要遺跡

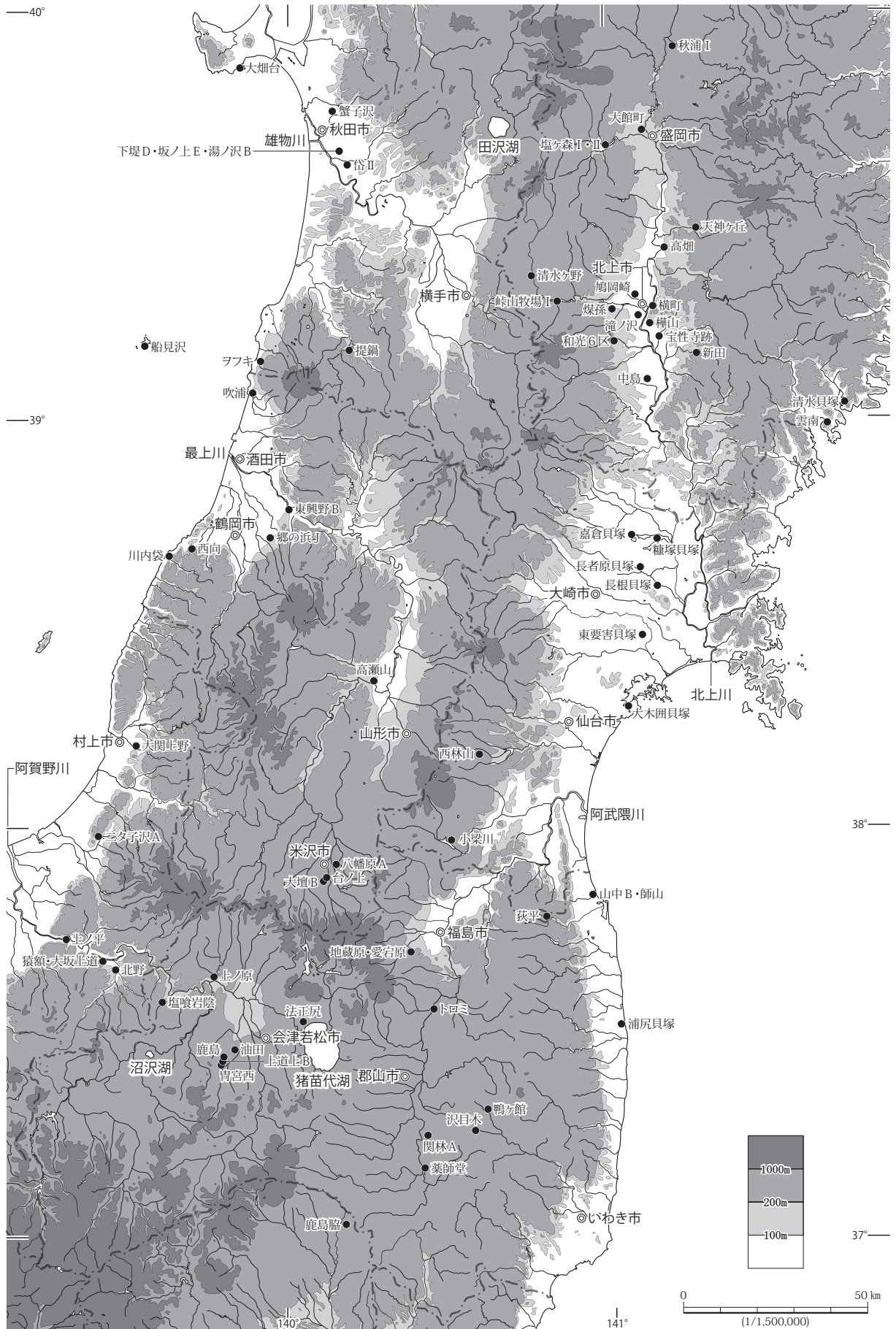


図2 東北中部・南部の縄文時代前期末葉～中期初頭の主要遺跡

塚系統」と称される土器である。口縁部を水平線で数段に区分し、その各段に縦の沈線を並べ挿入し、胴部を削り取ったような無文または縦方向の羽状縄文になるもので、縦沈線の代わりにジグザグを入れたものもあり、胴部はまっすぐなものと同らみを持つものがある。大木6式5期には出現しており、五領ヶ台I式並行期に続き、同II a式並行期頃には文様が単純化し、口縁部や口縁の折り返し部に縄文を加えたものが多くなる（今村2010：362-363頁）。

3 小梁川遺跡の概要

(1) 小梁川遺跡の立地と調査の経緯

小梁川遺跡は宮城県の南西端、白石川に沿った刈田郡七ヶ宿町しちかしゆく字小梁川・字板沢・字白ハゲに位置する。白石川は流路延長60.2kmの阿武隈川水系の左支川で、山形県境となる奥羽山系の蔵王連峰の南麓を水源とし、大梁川や小梁川等の小河川を合わせ蛇行しながら東流し、その流域には狭長な山間盆地（七ヶ宿盆地）が形成されるが、その後北方に流路を変え白石盆地に流入し、大河原・船岡等の盆地を繋いで、柴田町槻木付近で阿武隈川に合流する。また白石川を西方に遡ると奥羽脊梁山脈の鞍部である二井宿峠に至り、山形県内の最上川上流域の米沢盆地の北東端に通じている（図1・2）。

小梁川遺跡は阿武隈川との合流点から白石川を約41km（直線で約29km）遡った左岸の河成段丘に立地しており、南流する小梁川との合流点に当たり、遺跡の南端は白石川に面する段丘崖、東端は小梁川に面する段丘崖となっている。遺跡は標高260～270mの平坦面に形成され、その広がり東西約150m、南北約300mで、面積は約48,000㎡に及び、白石川に面する段丘崖の比高は約10mを測る。

小梁川遺跡の発掘調査は七ヶ宿ダム工事に伴って宮城県教育委員会により、1981年4～10月と1982年4～11月の2ヶ年にわたり実施され、『遺物包含層土器編』（相原ほか1986）、『縄文時代遺構編』（村田ほか1987）、『石器編』（佐藤ほか1988）の3冊の大部の発掘調査報告書が刊行されている。発掘調査では縄文時代早期末葉～中期中葉の遺構・遺物が検出されたが、主体となるのは前期末葉大木6式～中期中葉大木8b式までで、中期後葉大木9式以降は2km上流の舌状丘陵に立地する大梁

川遺跡（佐藤ほか1988）に主体を移したと推定される。

(2) 小梁川遺跡の集落構成

小梁川遺跡は、白ハゲ・原尻・板沢の三つの地区から構成される。国道113号の北側が白ハゲ地区、南側のうち東方が板沢地区、西方が原尻地区で、後二者の間には幅20m程度の谷（盗人沢ぬすびとざわ）が介在する（図3）。縄文時代前期末葉（大木6式）～中期中葉（大木8b式）の集落は南東側の板沢地区に形成されており、それ以前の早期末葉～前期初頭は原尻地区と白ハゲ地区、前期前葉は板沢地区に主体があり、後続する中期中葉（大木8b式）には板沢地区から白ハゲ地区に主体が移り、集落跡としての終焉を迎えている。小梁川遺跡で検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡35棟、焼け面を囲むピット群6基、土坑800基以上（フラスコ状土坑197基）、埋設土器遺構30基、墓壇8基、配石遺構2基、遺物包含層2ヶ所である。

集落の主体である板沢地区は、南西方向に張り出した東西約100m、南北約120mの舌状の段丘面で、標高261～262mを測り、東側は小梁川、南側は白石川、西側は盗人沢に画される（図3）。遺構の広がりを見ると、舌状の平坦面の大半を占め、直径約90mの環状集落の様相を呈している。中央のDC75区付近から261mのコンターラインにかけた径約20mの範囲の遺構密度が希薄で、その外周を土坑と竪穴住居跡が取り囲むが、南側の崖線付近の遺構も少なくなっており、三方を囲む構成となる。また埋葬に関わる墓壇や埋設土器は居住帯よりも内側に散在するが、墓域が特定の区域に集中する傾向は認められない。

板沢地区の集落は、遺構の分布状況から南北のDE列を基準に東群と西群に大別され、更に東群は東西の75列を基準に南群と北群に区分される。従って集落は三つの区域に大別され、「北東群」、「南東群」、「西群」と呼称する。また西群は境界が不明瞭であるが、75列で「北西群」と「南西群」に分割されと考えられる。

竪穴住居跡 板沢地区では縄文時代の竪穴住居跡が25棟検出されたが、その内訳は前期前葉10棟³⁾、中期初頭（II群期）2棟、中期初頭（III群期）1棟、中期前葉（V群期）3棟、中期中葉（VI群期）5棟、中期中葉（VII群期）2棟、時期不明2棟で、前期前葉を除く15棟は縄文中期の住居跡に該当する。その中には長軸が15m前

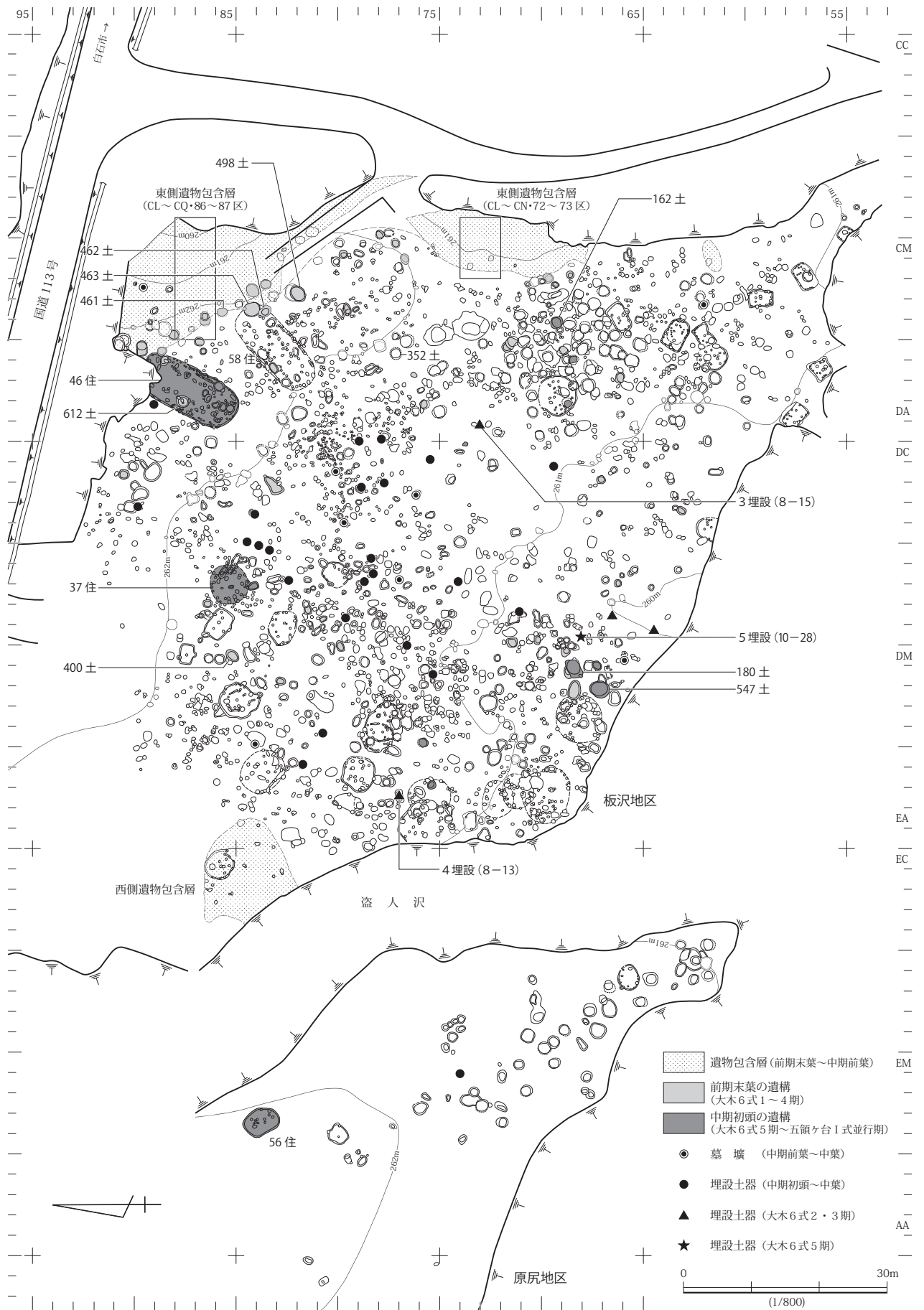


図3 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡板沢・原尻地区の集落構成 (縮尺: 1/800)

後の大型竪穴住居跡が2棟含まれる。主軸を集落の中心に向けて北東群に並列して存するが、時期が明確なのは46号住居跡(前期末～中期初頭)のみで、58号住居跡は近似した時期と推定されるものの、出土した土器は極僅かで、時期の特定は困難である。竪穴住居跡は西群(9棟)に集中し、北東群は大型竪穴住居跡、南東群は大木7b式(V群期)1棟と大木8b式(VII群期)2棟で構成されており、居住施設は西側に偏在していたことになる。また住居に関連した遺構として、焼け面を囲むピット群が6基検出されている。いずれも西側の居住帯に分布し、時期の特定は困難であるが、地床炉を有した竪穴住居の痕跡と推定される。

フラスコ状土坑 板沢地区では貯蔵施設と見られるフラスコ状土坑が172基検出された。その内時期が特定されたのは約半数の83基で、内訳は前期末葉(I群期)27基、中期初頭(II群期)8基、中期初頭(III群期)4基、中期前葉(IV群期)22基、中期前葉(V群期)17基、中期中葉(VI群期)3基、中期中葉(VII群期)2基で、大木6～7b式が大半を占めており、大木8a・8b式は5基に過ぎない。大木6式のフラスコ状土坑が北東群に多く分布するのに対し、それ以降の土坑は南東群に集中するが、該域にも大木6式期の土坑が認められる。また大半の堆積土は自然堆積と思われるが、南東群には人為的に埋め戻された形跡のあるフラスコ状土坑が多く認められる。なお大木7b式(V群期)の352号土坑(北東群)の底面からは、トチノキの炭化片が多量に出土した。

土器埋設遺構 板沢地区で検出された土器埋設遺構は29基(19号埋設土器の位置は不明)で、大半の土器が横位に埋設されており、底部を欠いた例が多数認められた。埋葬施設の一形態と考えられ、遺構の中でも中央寄りに位置するものが多く、前期末葉(I群期)4基、中期初頭(II群期)1基、中期初頭(III群期)1基、中期前葉(IV～V群期)17基、中期中葉(VI群期)4基、時期不明2基で、大木7b式が半数以上を占めている。

墓 墳 墓墳は人為的に埋め戻され、埋葬時に添えられたと思われる遺物を出土した楕円形・円形の土坑で、8基検出された。中央部に4基、北東群・南東群・北西群・南西群に各1基ずつ分布しており、伴った土器から大木7b～8a式に比定されている(1～5号墓墳)。また時期

の特定が困難である3基の墓墳(6～8号墓墳)からは、耳栓が出土している。

その他の土坑 板沢地区では所属時期の推定が可能な土坑が125基検出されている。その内訳はI群期27基、II群期17基(5基確認)、III群期8基(6基確認)、IV～V群期32基(11基確認)、VI群期37基(10基確認)、VII群期4基で、大木6～8a式に主体がある。円形や楕円形を基調とし、フラスコ状土坑よりも小規模で、全体的に散在するが、その中には貯蔵穴や土坑墓と思われるものも含まれるであろう。

小 結 集落中央部の遺構が希薄な分布状況から、環状集落到近い構成と判断したが、各種の遺構が同心円状の所定の圏内に配置された「重帯構造」(谷口2005:4-6頁)は明確でない。一方南東部にフラスコ状土坑が集中し、大型竪穴住居は北東群、居住域は西側といった遺構分布の偏在が見られ、集落内を分割することが可能であることから、環状集落の内部を直径的に区分した「分節構造」(谷口2005:4-6頁)は適合される。但し大木6式～8b式の長期間にわたる集落形成の結果であり、集落の主体は遺物包含層の形成やフラスコ状土坑の状況から前期末葉大木6式(第I群土器)～中期前葉大木7b式(第V群土器)であったと考えられる。しかしその間の住居跡は総数で6棟に過ぎず、それ以降が7棟と多くなっており、環状集落と決することには躊躇せざるを得ない。また南側は白石川の段丘崖で削平を受けたため、遺構が消失し少なくなっている可能性も否定できない。

(3) 小梁川遺跡の遺物包含層

東側遺物包含層は遺跡東縁の段丘面から段丘崖部分のCM67区からCO～CR90区で検出された大規模な捨て場跡で、南北約70m、東西約15m、最大層厚は約120cmを測り、最も分層されたCL72区の細別層位は10枚を数えた。包含層は更に広がっていたと推定されるが、北側は国道113号、東側は砂利採取施設によって削平されており、また包含層の中央部は白石川へ通じる道路によって削平され、北側と南側に分断されていた。

包含層は主にシルト質の暗褐色～黒褐色土で構成され、廃棄された礫と共に多量の人工遺物が出土したが、シカやイノシシの焼骨等の自然遺物も含まれていた。土器は前期末葉大木6式～中期前葉大木7b式が出土し、土器以外の人工遺物としては円盤状土製品、土偶、三脚形土

製品等の土製品、石鏃、石匙、石錐、石篋、石斧、石皿、磨石、凹石等の石器類が出土した。

調査は3m四方のグリッドを基本として、各グリッド毎の堆積層を分層して調査されたが、特に良好な堆積が確認されたのは、北側のCL～CQ・86～87区と南側のCL～CN・72～73区(図3)で、層位は上位から第I層～第V層の5枚に大別され、大木6～7b式にかけて5段階にわたる変遷過程が層位的に跡づけられ、出土土器は以下のように第I～V群土器に対比されている。

- ①遺物包含層第V層出土土器：第I群土器(主に大木6式1～4期)
- ②遺物包含層第IV層・第IV層上面出土土器：第II群土器(主に大木6式5期～五領ヶ台Ⅱ式並行期)
- ③遺物包含層第Ⅲ層出土土器：第Ⅲ群土器(主に大木7a式竹ノ下式並行期)
- ④遺物包含層第Ⅱ層出土土器：第IV群土器(主に大木7b式)
- ⑤遺物包含層第I層出土土器：第V群土器(主に大木7b式)

板沢地区では遺物包含層以外に、第VI群土器(主に大木8a式)の竪穴住居跡5棟と第VII群土器(主に大木8b式)の竪穴住居跡2棟が検出され、白ハゲ地区では第Ⅷ群土器(主に大木8b式)の竪穴住居跡5棟が検出されている。従って小梁川遺跡の出土土器は8群に分類されているが、層位的な上下関係が判明したのは、上記した第I～V群土器に限られる。

また板沢地区の西端の平坦面でも、小規模な遺物包含層が検出されている(西側遺物包含層)。南北約14m、東西約14m、最大層厚は約20cmを測り、にぶい黄褐色を呈し、1枚の層位を確認した。縄文前期前葉～中期中葉(大木8b式)までの土器が出土したが、主体をなしたのは第Ⅲ群土器(大木7a式竹ノ下式並行期)～第IV群土器(大木7b式)であった。なお48号住居跡(第V群土器)と重複関係にあるが、同住居跡は地山面で検出されており、層位的な上下関係は判然としない。

(4) 大木6式期～中期初頭の集落構成

板沢地区では集落の形成が前期末葉大木6式期に開始され、中期中葉大木8b式(Ⅶ群期)まで連続と継続したが、最初期の大木6式の竪穴住居跡は検出されていない。時期不明の住居跡や焼け面を囲むピット群に見出せる可

能性も否めないが、大木6式(1～4期)の遺構としては、フラスコ状土坑27基、その他の土坑27基、埋設土器4基が検出されている。遺構の分布は、北東群、南東群、南西群、北西群に一定のまとまりが見られるが、該期のフラスコ状土坑は北東群に広く分布しており、また中期に集中する南東群にも認められる。

一方中期初頭(大木6式5期～五領ヶ台Ⅰ式並行期)は竪穴住居跡2棟、フラスコ状土坑8基、その他の土坑17基、埋設土器1基が検出されている。遺構の分布は先行型式を踏襲しており、4ヶ所のまとまりが認められる。竪穴住居跡は北東群と北西群に1棟ずつ検出されたが、その内大型竪穴住居跡の46号住居跡は、大木6式4期の土坑(612号土坑)を切って構築されており、中期初頭とされている。堆積土1・2層からは大木6式2～4期や五領ヶ台Ⅰ式並行期の土器が出土しているが、下位の3層出土の報告がなく、明確な時期の特定は困難である。また後述する37号住居跡は五領ヶ台Ⅰb式並行期に位置づけられる。

大木6式1期に位置づけられる462号土坑や498号土坑は北東群に構築されており、集落形成の最初期は東側遺物包含層のある北東群に生活の痕跡が認められる。しかし同2期以降はそれ以外の区域にも遺構が分散しており、当初からある程度環状構成が企図されていた可能性も考えられる。なお原尻地区で検出された56号住居跡は、床面から出土した土器から五領ヶ台Ⅱa式期に帰属される。しかし五領ヶ台Ⅱ式並行期の遺構は僅少となっており、集落として一時的な衰退期を迎えたと推定される。

4 一括性の高い遺構内出土土器

小梁川遺跡出土の大木6式土器を考察するに当たり、一括性が高いと思われる遺構内出土の土器を整理して、同遺跡の東側遺物包含層や他の遺構から出土した土器を検討する上での指針としたい。

(1) 461号土坑出土の土器

461号土坑は調査区北東群の東側遺物包含層上端のCP85区で検出された。口径144×120cm、底径152×130cm、検出面からの深さ92cmの楕円形のフラスコ状土坑で、図4-1・2が堆積土中位の2層、3～6が上位の1層から出土した。1・4・6が長胴形土器、2・

5が球胴形土器、3が浅鉢形土器で、球胴形の2例は今村啓爾氏が大木6式2期として図示した土器である(今村2006c:60頁)。なお堆積土は自然堆積が中心であるが、部分的に人為的に埋め戻したとみられている。

2と5は底部近くで縮約する形で、長胴形と区別されるが、胴部から円筒状の脚台状部への移行が比較的緩やかで、胴上部の文様帯の幅も狭い。2は口縁部文様帯に横走した4条の結節沈線文と弧状の貼付文を配し、括れ部に結節沈線文、胴上部にジグザグの結節沈線文を施す。5は双頭状の口縁で両端に2本セットの縦の貼付文を配し、口縁部文様帯は半截竹管による3段のジグザグ文、胴上部は縄文地(LR)に半截竹管の二重の山形文と半円文で構成される。長胴形の1・4は双頭波状の口縁で、口縁肥厚部が厚く幅狭で、突起直下に太い沈線による渦巻風の文様を配し、突起間を太い背向した凹線(1)や弧状区画(4)が結ぶ構図となる。1は頸部文様帯に半截竹管による平行沈線文を巡らし、円形貼付文を配する。3は折り返され肥厚した口縁部の下端に三角形印刻文を加えた浅鉢で、底部近くが僅かに縮約しており、東側遺物包含層出土品(CP・CO86区)とも接合関係にある。

461号土坑は長胴形と球胴形土器の特徴から、大木6式2期の一括性の高い内容と言えるであろう。

(2) 462号土坑出土の土器

462号土坑は調査区北東群、461号土坑の5m南方のCP83区に位置する。大型竪穴住居跡である58号住居跡と後述の463号土坑と重複関係にあるが、新旧関係は判然としない。口径203×164cm、底径120×117cm、遺構検出面からの深さ46cmの楕円形の円筒状土坑で、図4-7・8が底面、9が堆積土上位の1層から出土した。なお堆積土は自然堆積とみられている。

7・8は長胴形土器で、口縁部が肥厚し外傾する。7は胴部中位が膨らんで頸部で括れ、口縁下端部に刻みが連続的に加えられ、頸部には半截竹管による平行沈線文と菱形の貼付文(一部に刻み)が施される。8は胴上部が膨らみほぼ直線的に底部に至る器形で、肥厚した口縁部が短く外折し、無文帯となる。

462号土坑は、底面から出土した7と8の特徴から、大木6式1期の一括性の高い資料と判断される。しかし1層から出土した9は口縁部が弧状の隆起線で構成されており、大木6式2期に比定され、混入品と見なされる。

なお松田光太郎氏は、この3点を「大木6式土器古段階」として図示している(松田2003:24頁)。

(3) 498号土坑出土の土器

498号土坑は調査区北東群の461号土坑の10m南方のCO81・82区に位置する。口径242×214cm、底径187×182cm、遺構検出面からの深さ68cmの楕円形の円筒状土坑で、図4-13が底面、12・14～16が堆積土上位の1層から出土し、10・11は「x層」と注記されており、正確な出土層位は不明である。なお堆積土は自然堆積とみられている。

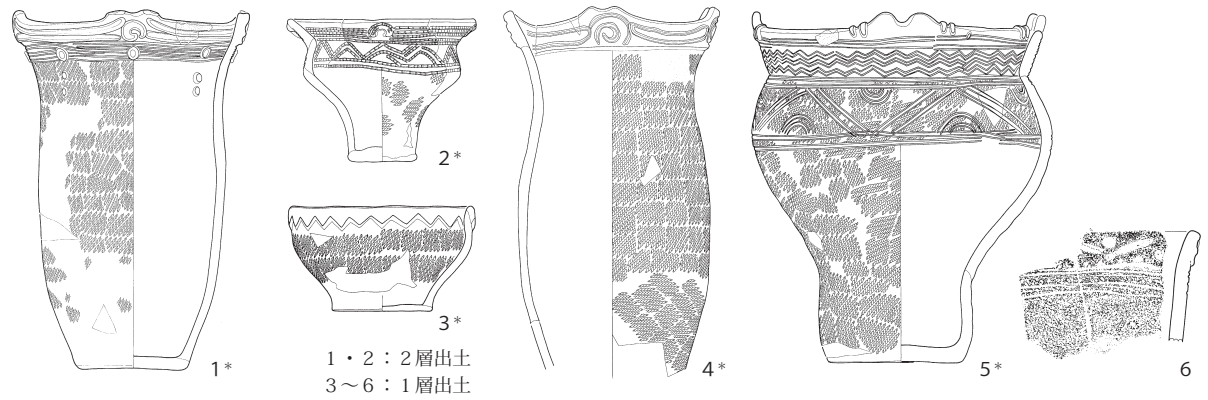
10・13は球胴形の器形と思われ、10は胴部の膨らみが強く、肥厚した口縁部が短く外折する。口唇上が刻まれ、口縁部には4単位の縦長の貼付文の間に縦位の側面圧痕(LR)が加えられる。括れ部以下は縄文地(LR)に横位の結節沈線文と半截竹管による菱形文と横線の交互文様が配されるが、菱形文にはボタン状貼付文が伴い、地文に横位の結節回転文も認められる。13は円形と方形の隆起線を貼り付け、区画に沿って側面圧痕(L)が加えられ、円形貼付文の中心は貫通孔となる。14と15は同一個体で、球胴形に連なる器形であるが、口縁部は縦位の貼付文と沈線による2列のジグザグ文、胴上部は文様帯の幅が狭く、斜位の平行沈線文(15)と縦位のジグザグ文(14)で構成される。

498号土坑は底面から出土した13の口縁部の特徴から、大木6式2期の公算が高いと判断されるが、10・11の出土層位が不明のため、1～2期の時間幅に位置づけておきたい。

(4) 612号土坑出土の土器

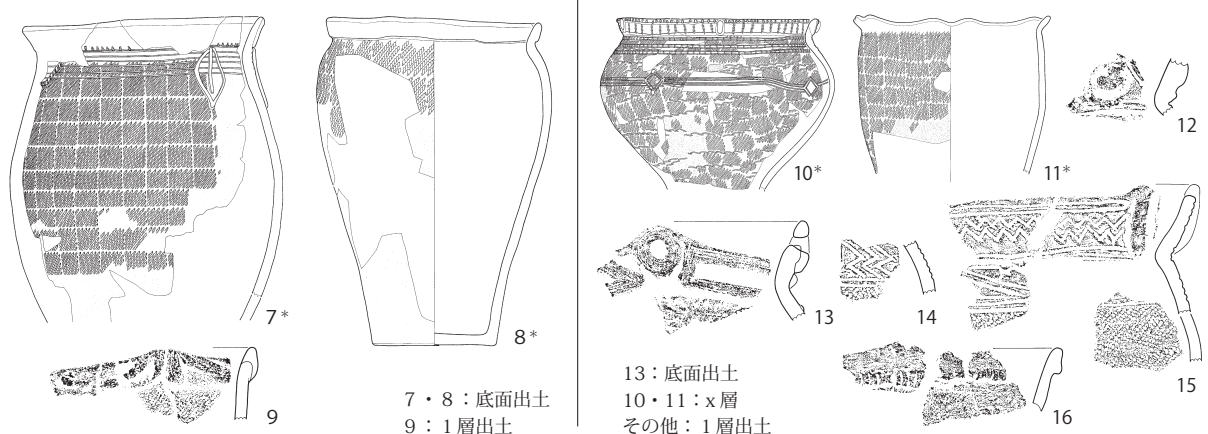
612号土坑は調査区北東群の大型竪穴住居跡(46号住居跡)の中央東寄りで検出され、同住居に切られている。口径190×166cm、底径184×168cm、住居床面からの深さ120cmの楕円形のフラスコ状土坑で、図4-17が底面、18～21は堆積土上位の1層から出土したが、同土坑は人為的に埋め戻されたと推定され、土坑内には46号住居跡の柱穴が掘り込まれている。

17は胴部中位が膨らみ、口縁部が外傾した長胴形で、4単位の波状口縁で、波頂部に粘土紐が横位に貼付される。口唇に沿って平行沈線が巡らされ、波頂部直下に円文と水平の橋状把手、突起間中央に円文や半円文を配し、半円文を囲むように縦の弧を繰り返す文様となる。括れ



1・2：2層出土
3～6：1層出土

461号土坑出土土器

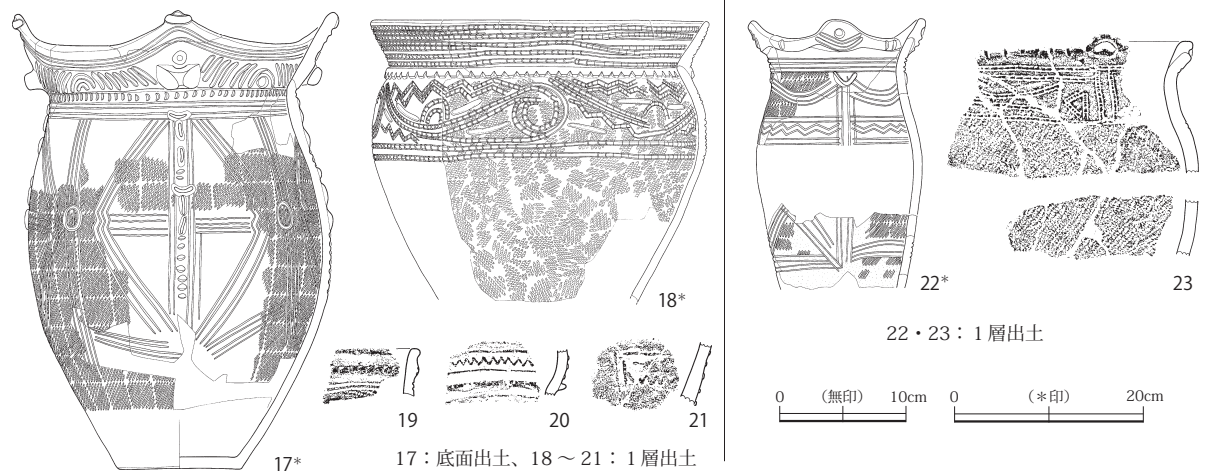


7・8：底面出土
9：1層出土

462号土坑出土土器

13：底面出土
10・11：x層
その他：1層出土

498号土坑出土土器



17：底面出土、18～21：1層出土

612号土坑出土土器

22・23：1層出土

0 (無印) 10cm 0 (*印) 20cm

463号土坑出土土器

図4 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡遺構内出土土器(1)

部には竹管外面による押し引きが巡り、その直下に平行沈線を重ね、胴部文様帯は縦の沈線を主体に構成される。波頂部に対応して縦の平行沈線が垂下し、その区画内に弧状と縦の貼付文や刺突列が施され、波底部直下の縦線で器面を分割する。その間に縦の截頭山形文を向かい合わせに配して、対角線状の構図となるが、截頭山形文の頭はジグザグとなり、円文を挟んで対峙し、菱形区画内

には横位の波状沈線文が配され、底部は網代痕を有する。18は東側遺物包含層出土品(CQ87・CL74・CK80区)とも接合関係にあるが、胴部が張り出した球胴形の器形で、最大径は胴上部にあり、文様帯の幅が狭く、底部近くで縮約する器形と思われる。口縁部には5～7列の結節沈線文が巡らされ、括れ部は太い隆起線の下端に三角形印刻文が加えられ、胴部文様帯は縄文地(RL?)に下

限を結節沈線文で画し、2本の結節沈線による弧線とその末端が渦巻き風となり、その余白部に短沈線や結節沈線のジグザグ文や半円文が埋め込まれる。

底面から出土した17は口縁部の縦の弧状沈線と胴部の縦線上の弧状貼付文から、大木6式4期に位置づけられ、上層から出土した20・21も端重ねジグザグの貼付文から、同期に比定されよう。一方18は3期の球胴形浮線文系土器に近似するが、胴部から台状部への移行が比較的緩やと思われることから、2期に位置する公算が高いであろう。従って612号土坑は大木6式2期と4期の土器の混在と見られるが、上位から出土した18は混入品で、土坑の時期は4期に帰属されよう。同土坑は46号住居跡と重複関係にあり、同住居より古くなる。よって大型竪穴住居跡は、出土土器から中期初頭（五領ヶ台I式並行期）に位置する公算が高いと思われる。

(5) 463号土坑出土の土器

463号土坑は調査区北東群で検出され、大型竪穴住居跡である58号住居跡と前記した462号土坑と重複関係にあるが、新旧関係は判然としない。口径248×172cm、底径164×138cm、遺構検出面からの深さ30cmの楕円形の土坑で、図4-22・23は底面から15cm上位の1層から出土した。なお堆積土は自然堆積とみられている。

22・23は長胴形の土器で、22は4単位の大波状口縁で、肥厚した口縁部の波頂部直下に凹円とその下縁を縁取る弧状沈線、波底部にも凹円が配される。頸部には半截竹管による平行沈線文を巡らし、胴部は波頂部に対応して垂下した縦の平行沈線文と胴部中位の横線で分割され、上半は弧線文、過半はX字形の沈線文で構成され、波頂部直下の縦線の上端には弧状の貼付文が加えられる。大木6式3期の典型的な長胴形深鉢である。23は平縁で円弧状の突起を配し、突起の直下に弧状の凹線を加え、口唇上には粘土紐が縦に貼付される。上下限を結節沈線で画した頸部文様帯は、突起直下の縦位の平行線を基調に背向した弧線や三角形の結節沈線文が配される。括れ部を跨いだ頸部の文様帯は大木6式2期にしばしば散見され、結節沈線による発達した文様も同期の特徴と言える。

463号土坑は22が大木6式3期、23が同2期に位置づけられ、混在の可能性が高いと判断される。よって編年上の指標としての有用性は認められない。

(6) 162号土坑出土の土器

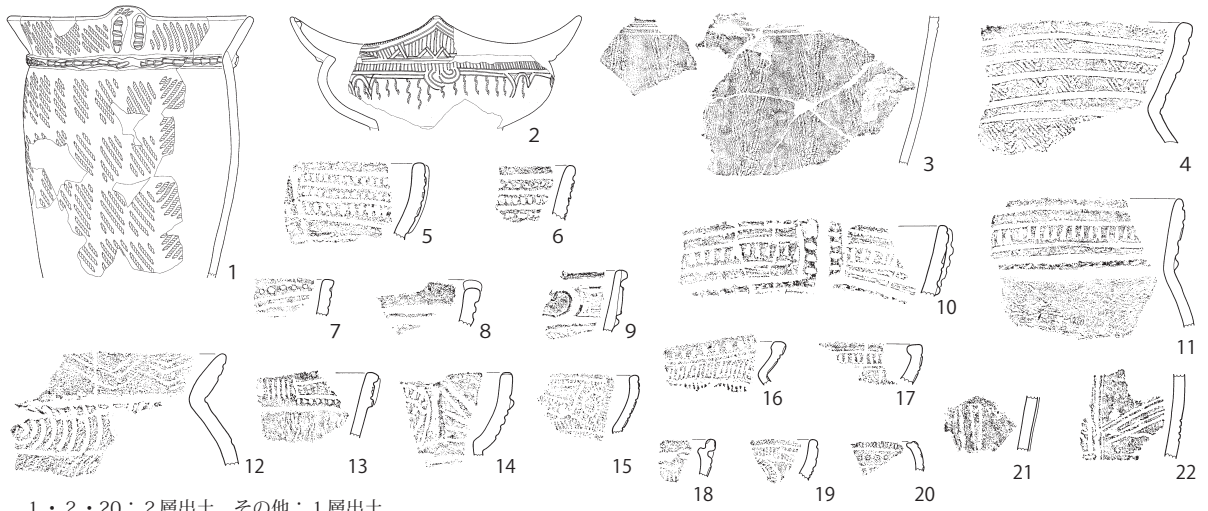
162号土坑は調査区南東群のCP・CQ69区で検出された。口径156×146cm、底径156×146cm、遺構検出面からの深さ92cmの円形のフラスコ状土坑で、図5-1・2・20が堆積土上位の2層、その他は最上位の1層から出土した。なお堆積土は自然堆積が中心であるが、部分的に人為的に埋め戻したとみられている。

2は今村氏が大木6式5期に位置づけた土器である(今村2010:391頁)。口縁部は推定4単位の大波状で内彎気味に立ち上がり、口唇上が刻まれ内側が凸字形に突出し、球胴部分を縮小させ台状部の太さが増している。文様は半截竹管で施文されており、口縁部は縦位の集合平行沈線を基本とするが、下限の区画線に沿って三角形に縁取られ、その内側が削り取られる。球胴部上半も狭い区画に縦位の集合平行沈線が充填され、下限の区画線は波頂部直下で途切れ懸垂文風となり、球胴部下半は縦位の結節回転文が施される。幅の狭い半截竹管による集合平行沈線と平行線で縁取った区画を削り取る手法は、図10-23と同様に中部高地の松原式とのつながりを想起させる(今村2006c:63頁)。

その他に「糠塚系統」の土器も出土している。口縁部を水平線で数段に区分した括れた器形の土器で、4・6・10・11が該当するが、口縁部に縦の粘土紐を貼付し括れ部に隆起線を巡らす例(10)から、口縁部の平行沈線を欠いた1も同系統に含めることができよう。また3は円筒下層d式の影響を受けた木目状撚糸文である。上記から大木6式5期の型式内容を示す重要な成果とすることができ、「糠塚系統」が同5期に出現したことを窺うことができる。しかし大木6式4期の球胴形(12)や長胴形(22)、また短沈線を充填した五領ヶ台I式並行期の土器片(14・16・18・19)も散見され、一部に年代的に前後する混入品が含まれている。

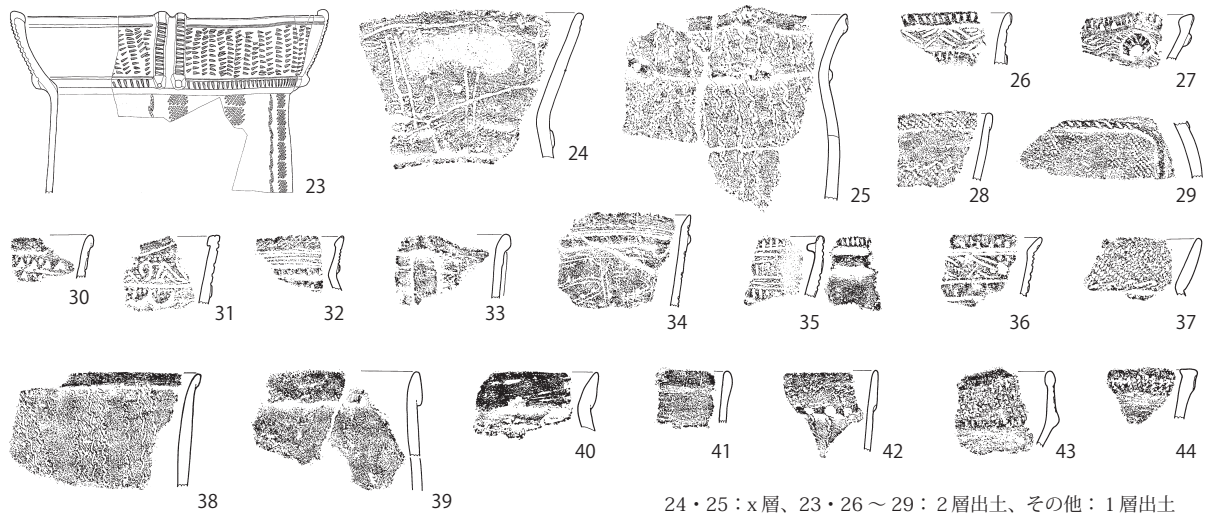
(7) 547号土坑出土の土器

547号土坑は集落の南西群のDN66・67区、DO66・67区で検出された。口径274×242cm、底径260×242cm、遺構検出面からの深さ121cmの楕円形の大型フラスコ状土坑で、図5-23・26～29は堆積土上位の2層、24・25がx層で正確な出土層位が不明で、その他は最上位の1層から出土した。なお堆積土は自然堆積とみられている。



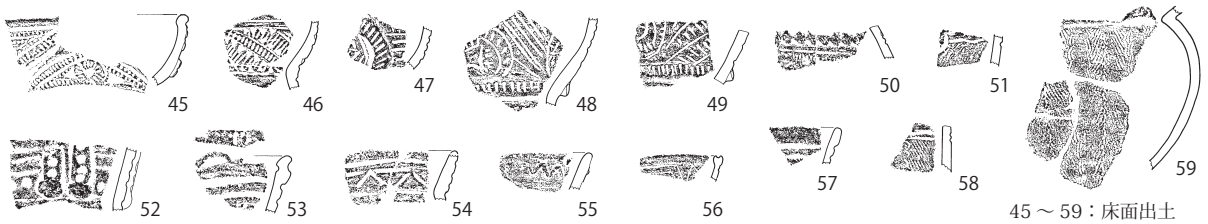
1・2・20：2層出土、その他：1層出土

162号土坑出土土器

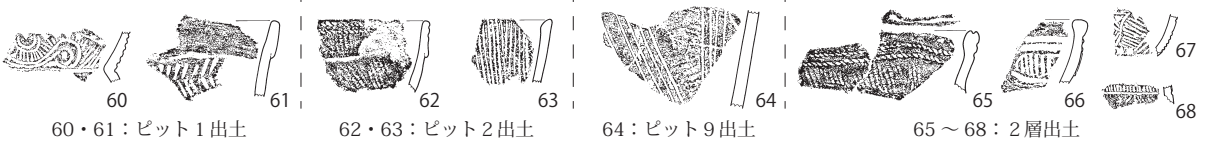


24・25：x層、23・26～29：2層出土、その他：1層出土

547号土坑出土土器



45～59：床面出土

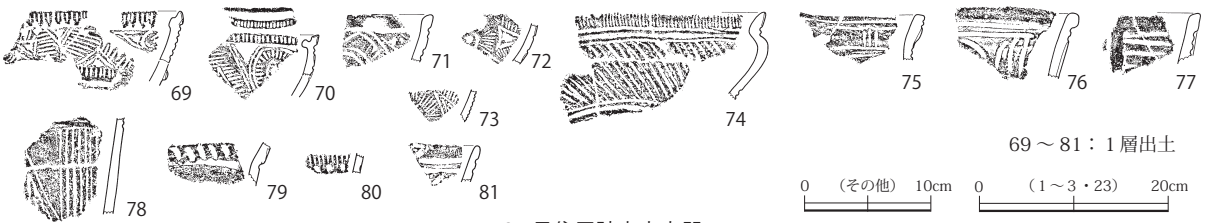


60・61：ピット1出土

62・63：ピット2出土

64：ピット9出土

65～68：2層出土



69～81：1層出土



37号住居跡出土土器

図5 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡遺構内出土土器(2)

547号土坑から出土した土器は主に「糠塚系統」の土器と五領ケ台I式並行期の土器で構成される。

26・27・30～32・35・36は口唇の断面形や三角形印刻文・短沈線等から五領ケ台I式並行期に位置づけられるが、密接平行するジグザグ文(26・27・36)や間隔をとって加えられた短沈線(35)、簡略化された口縁部文様帯から、五領ケ台Ib式並行期に相当する可能性が高く、33・34も同様であろう。23～25は「糠塚系統」の土器で、特に23は今村氏が「東北地方の五領ケ台I式並行期(おそらくIb式並行)」として図示している(今村2010:393頁)。頸部で括れ、口縁部が内彎気味に立ち上がる器形で、胴部は円筒状を呈する。口縁部は口端に沿った沈線と縦の刻み隆起線、括れ部の刻み隆起線で矩形区画が作出され、「ハ」字状の短沈線が充填され、胴部は縦の結節回転文が施される。25は緩い波状の折り返し口縁で、口縁部から胴部にかけて縦の結節回転文が施される。また折り返し状口縁の28・38～42は「下小野系粗製土器」(今村2010:128頁)に類似した土器である。40を除き屈曲のない器形で、28は横位、38は縦位、42は口縁部に横位、胴部に縦位の結節回転文が施され、39・41は胴部が無文となる。

547号土坑は破片資料が主体で混入品も存するが、五領ケ台I式並行期でも新相の同Ib式並行期の一括性の高い内容とみられ、「糠塚系統」の土器と「下小野系粗製土器」類似の土器が共伴した重要な成果となっている。

(8) 37号住居跡出土の土器

37号住居跡は集落の北西群で検出された。北壁以外は削平を受け明確でないが、壁柱穴と思われるピットの配列から、5.6×5.4mの円形の竪穴住居跡と推測され、壁高は最大12cmと薄く、堆積土は第1層と第2層に区分されているが、第2層は西側に堆積するのみで、両層とも床面に接しており、上下関係は認められない。床面は緩やかに起伏し、ほぼ中央に地床炉(74×50cm)が検出されたが、その西側の1号土坑からは317点のフレイクが出土し、貯蔵施設であったと推定されている。住居跡出土として37点の土器片が報告されているが、図5-45～59が床面、60・61が主柱穴とみられるピット1、62・63が同じくピット2、64が同じくピット9、65～68は西側の第2層、69～81は第1層から出土した。

37号住居跡から出土した土器は、同心円や渦巻とそれから伸びる斜線を組み合わせた構図で、短沈線や三角形印刻文が加えられており、五領ケ台I式並行期が主体となる。その中に「糠塚系統」の土器(52・77)や「下小野系粗製土器」類似の土器(62)が加わるが、63は縦位の条線文、65は口縁に沿って側面圧痕(LR)が配される。またドーナツ形の貼付文(47)や梯子状貼付文(66)は大木6式5期の特徴となっており、混入品も含まれる。74は口縁部上端が短く「く」字形に外折したキャリパー形の器形である。内彎した口縁下部に半截竹管による斜位の集合平行沈線、口端には縦の側面圧痕(RL)で細線文風の刻みを現しており、中部高地の踊場式との関連を窺わせる。

37号住居跡は五領ケ台I式並行期に位置づけることができ、547号土坑と同様に「糠塚系統」や「下小野系粗製土器」類似の土器も認められ、該期の数少ない住居跡として重要な成果となっている。

(9) 小 結

8基の遺構を取り上げたが、462号土坑が大木6式1期、498号土坑が同1～2期、461号土坑が同2期、612号土坑が同2～4期、463号土坑が同2～3期、162号土坑が同5期、547号土坑と37号住居跡が五領ケ台I式並行期に位置づけられる。その他に北西部の400号土坑からも、大木6式3期の一括資料(図9-10・12)が出土している。2例とも長胴形で、10は弧線と半円形の沈線を基調とした口縁部文様、12は半截竹管の縦線と弧線からなる胴部文様が配されており、同期の指標に置くことができる。また南西部の180号土坑では大木6式5期の土器(図10-27・29・30)が出土したが、同3期の土器片も混在している。4期のまともには確認できないが、図4-17が612号土坑の底面から出土しており、土坑自体は同期に帰属される。なお松田光太郎氏の先行研究では、462号土坑が「大木6式土器古段階」、542号土坑(図9-13)が「大木6式中段階新相」、612号土坑が「大木6式新段階古相」、915号土坑(図10-24)が「大木7a式」として紹介されている(松田2003:26頁)。

大木6式1～4期の461・462・463・498・612号土坑が、集落の北東群に集中している(図3)。これに対し大木6式5期の162号が集落の南東群、中期初頭の

547号土坑が南西群、中期初頭の37号住居跡が北西群に位置しており、図4・5の資料からは大木6式1～4期の主体が北東群の遺物包含層一帯にあり、それ以降集落全体に拡散したようにも受け取れる。しかし前記したように大木6式2～3期の土坑や埋設土器は、集落の南西群と北西群にも点在しており、ある程度環状構成を意図して集落の形成が開始されたと推定される。

5 小梁川遺跡出土の大木6式土器

本章では、東側遺物包含層から出土した土器と前章で扱わなかった遺構内出土の土器を主に取り上げる。前者の土器は3m四方のグリッドの層位毎に提示され、大木6式1～4期が第V層、大木6式5期～五領ヶ台I式並行期が第IV層（南側のみ確認）から出土したと報告されている。大筋では土器の変遷を層位的に明示した内容となっているが、今村啓爾氏の編年研究に照らしてみると、前期末葉～中期初頭に限っては層位的に有効な成果を抽出することが叶わなかった。従って以下では、型式学的所見に基づいて土器を配列した。

(1) 小梁川遺跡出土の大木5式土器

小梁川遺跡で出土した大木5式は僅かではない。しかも今村氏が「小梁川遺跡は大木5b式が全く出ていない（大木5a式はある）遺跡」（今村2006c：40頁）と評価するように、大木5a式にほぼ限定される（図6-1～11）。口縁部が外反した朝顔形と頸部が括れ胴部が内彎した器形（1・2・7）が存し、ほとんどが平縁であるが、鋸歯状装飾体を配した3は大波状口縁と思われる。文様は縄文地に2本一組のジグザグ状の貼付文を特徴とするが、口唇上に鋸歯状装飾体を持つ土器には貼付文はなく、鋸歯状の切り込みは大きく鋸歯数も少ない（1・3・4）。また地文には単節LRが多用され、撚糸文の例（3・4）も認められる。2は小波状の貼付文で頂点が角張ったものでないことから、大木4式の可能性も否めないが、同例は2本一組の貼付文で構成され、類似した器形の7が短い粘土紐を折り重ねており、大木5a式に含めることができるであろう。

12・13は西側遺物包含層から出土した大木5b式土器である。小梁川遺跡の北東方26kmの柴田郡川崎町にしばやしやま西林山遺跡が、大木5b式の内容を補う資料に相当する（図7）。西林山遺跡を参照すると、朝顔形と頸部が弱

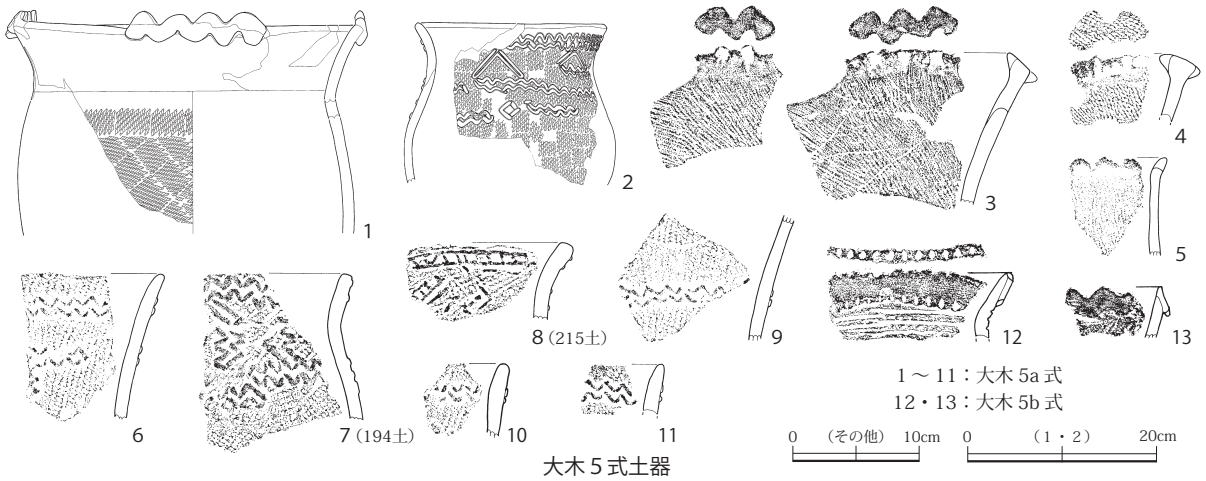
く括れた器形が存し、口縁の折返し部とその下の幅の狭い頸部文様帯からなり、それより下は縄文となる。折り返し部の上下端の刻みは鋸歯状装飾体の名残で、頸部には半截竹管によるジグザグ文や平行沈線が施される。また鋸歯状装飾体が口唇上の突起ではなく折り返し口縁として作出された例（図7-7）も認められる。小梁川遺跡の西側遺物包含層からは同様の特徴を持った土器（図6-12・13）が出土しており、この2例は数少ない大木5b式に位置づけられると考えられる。

(2) 小梁川遺跡出土の大木6式1期

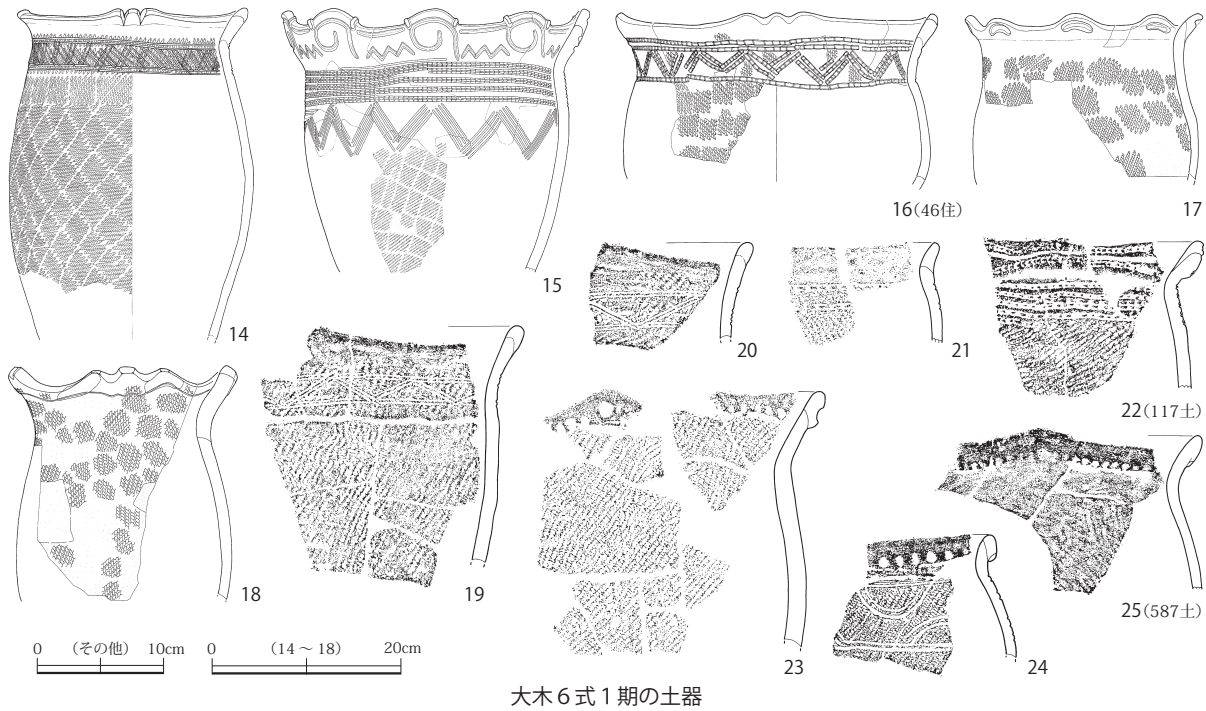
小梁川遺跡では大木5b式がほとんど見出せず、後続する大木6式1期についても判然としない。第I群土器として報告されており、遺構出土例としては、北東群のフラスコ状土坑である462号土坑（図4-7・8）と498号土坑（図4-10・11）に可能性を指摘するに留まる。球胴形と長胴形の分化はまだ途上にあり、1期の内容が明確になっている福島県会津地方では、口縁部の厚みが強く、頸部で外折する器形で、その括れ部を刻み隆起線（結節浮線の例もある）が横走り、胴部は水平方向の結節回転文が顕著である（小林2016）。しかし小梁川遺跡では上記した特徴の土器がほとんど見られず、会津方面の影響が希薄であった可能性が指摘される。

図6-12～25は、大木6式の中でも古相と思われる土器を抽出した。いずれも頸部が括れ口縁部が外反した長胴形の器形で、球胴形は明確でない。14は今村氏が「大木5b式といってもいいような土器であるが、口縁無文部下の刻みは痕跡的で、頸部文様帯の中は大木5b式には例を見ない交叉線で、これは5b式の山形と関係するとともに大木6式初期の胴部の交叉線とも関係するもの」であり、「大木5b式と6式の過渡的な型式」（今村2006c：40-41頁）とした土器である。東側遺物包含層のCL73区6層（第V層）から出土しており、この段階から包含層の形成が開始されたことになる。

15～25は口縁部の装飾がそれ程進んでいない土器で、全て1期に比定できるかどうか確証は持てないが、23～25は「厚みの強い口縁部文様帯（無文の場合も多い）」（今村2006c：41頁）の土器を抽出した。いずれも緩い波状口縁で、折り返され肥厚した口縁部の下端が刻まれ、23は波頂部直下に凹円が加えられる。24は頸部に半截竹管の上下に対向する弧線が配されるが、この



大木 5 式土器



大木 6 式 1 期の土器

図6 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉の土器 (1)

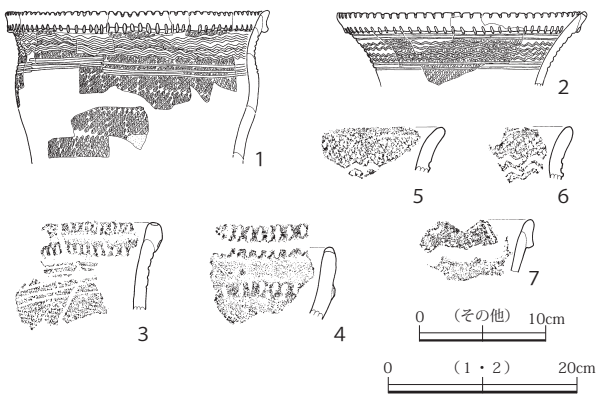


図7 宮城県川崎町西林山遺跡出土の大木 5b 式土器

弧線文は大木 5b 式の狭い頸部文様にしばしば認められるものであり、その影響が推定される。

15 は口唇上に円弧状の突起とその左右に縦の貼付文を配し、口縁部は突起直下に「の」字状沈線、突起間に口唇に沿った沈線とジグザグ文を配する。括れ直下には結節沈線文を 5 列巡らし、胴上部には半截竹管による大きな山形文が施される。口縁部に渦巻風の文様を持つ点では同 2 期の可能性も考えられるが、口縁下の三山のジグザグは折り返し部下端に多用される三角形印刻文が沈線化したもので、また萌芽的な胴部文様を有する点で同 1 期に位置づけた。

16・19・20 は縄文地の括れ部に半截竹管によるジグザ

グ文を配した土器で、16は大型住居跡(46号住居跡)出土の土器片と接合関係にある。緩い波状口縁で波頂部は三山状をなし、口縁部は無文帯となり、括れ部の直上に結節沈線による2列のジグザグ文が配される。19・20は同一個体で、括れ部の狭い区画内に横長のジグザグ文が配される。22は緩い波状口縁で、肥厚し狭い口縁部の上端と下端に結節沈線文を施し、その間に沈線を加えており、頸部に4～5列の結節沈線文を巡らす。17・18は波状口縁で縄文のみを施文した簡素な土器であるが、17は波頂直下に弧状の太沈線が加えられ、18は口縁に沿って肥厚帯が作出され、波頂部は三山状を呈する。

大木6式1期に小梁川遺跡の集落の形成が開始されるが、僅かな痕跡を残すのみでその内容は明瞭とは言い難く、形成が本格化するのと同2期以降となっている。

(3) 小梁川遺跡出土の大木6式2期

小梁川遺跡では第I群土器として報告されており、球胴形と長胴形が分化したとはまだ言い切れないが、球胴形土器が明確になってくる。遺構としては北東群のフラスコ状土坑である461号土坑(図4-1～5)が指標となり、東側遺物包含層ではCP86区7層(第Vc層)に資料(図8-1・7・18)がまとまっている。口縁部文様が複雑化し、双頭波状の口縁が発達する点に特徴付けられるが、長胴形では頸部の刻み隆起線(11・14)が少ない一方、胴部文様を持ったもの(14・17～19)が多く見られる。図8-1～3・12・14は、今村氏が大木6式2期として図示した球胴形と長胴形の土器である。

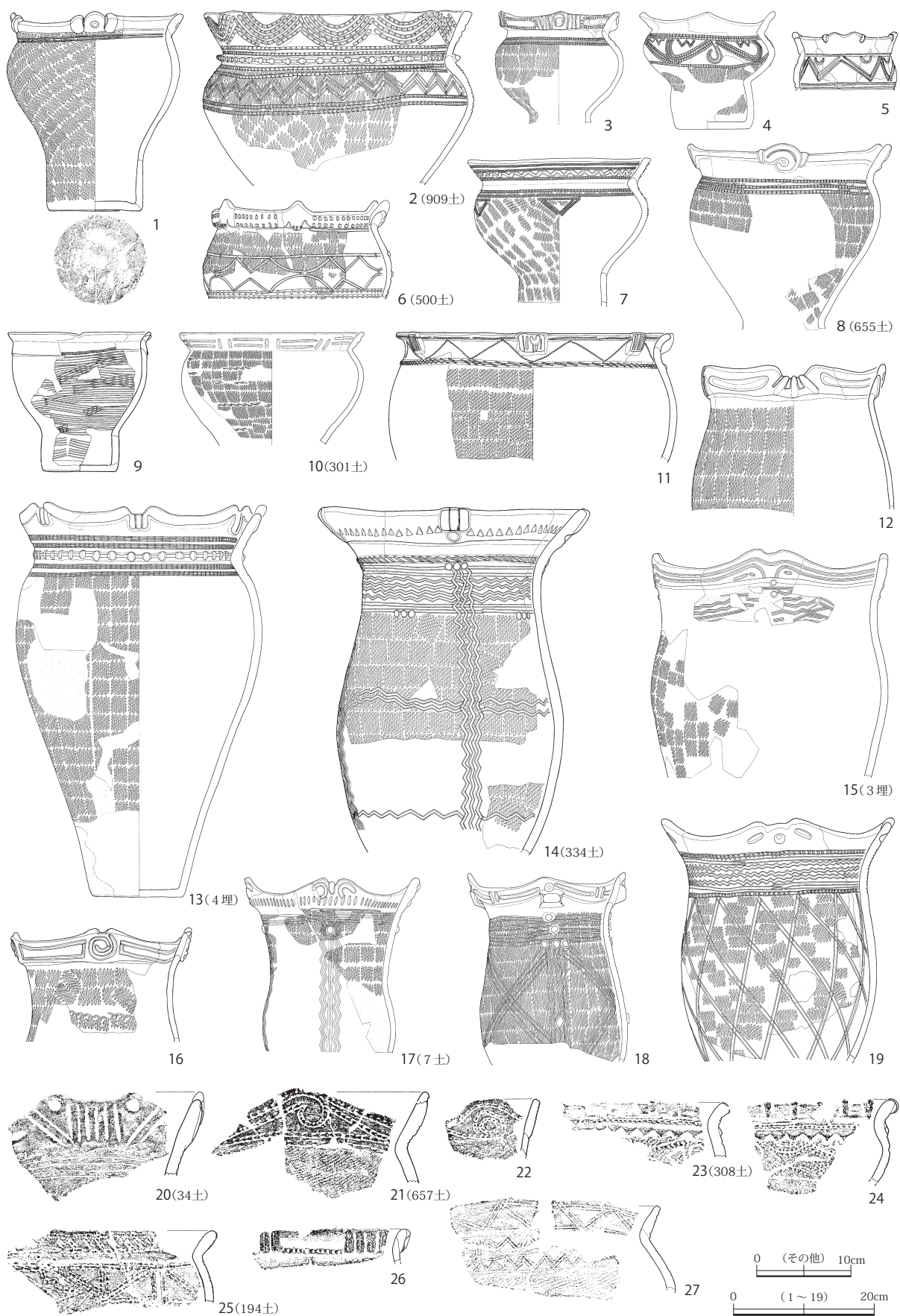
1～11・21・23～27は球胴形またはそれに類した器形の土器であるが、長胴形でありながら胴部の膨らみが強く、どちらとも言いにくい器形(2・6・11・21)もあり、球胴形の器形は胴部から円筒状の脚台状部への移行が比較的緩やかである(1・7)。口縁部は肥厚したもの(3・26)もあるが、伸張化の過程にあり、文様を配した例(2・3・7・25・27)も現れるが、それ程複雑化していない。平縁と波状口縁が存しており、口唇上に山形や円弧状の突起(1・5・6・8)が配され、突起の両脇に粘土が貼付され(1・5・8)、また括れ部に刺突を加えた隆起線を巡らしたり(2)、括れ部直下の隆起線下縁に三角形印刻文を加えた例(図4-18、図8-23・24)も見られる⁴⁾。

球胴形の胴上部に文様が配されるが、結節沈線文(3・

8)や結節浮線文(7)による水平線や、大振りのジグザグ・山形文(2・4・5)等、比較的単調な文様で構成される。2期の段階では渦巻文はまだ未発達で、描線が時計回りに丸く巻き込んで反転した巴状の図形(図4-18、図8-21)が初現の様相であることが指摘され、「J」字状の浮線文(4)についても同様のことが言えよう⁵⁾。

2は口縁部の連弧文と区画線が結節沈線、胴上部は縄文地(LR)に半截竹管による2列のジグザグ文が配される。6は胴部の膨らみが強い器形で、口唇上に6単位の山形突起を配し、肥厚した口縁部に方形の刺突列が2段巡らされるが、突起直下では途切れ、その下端に三角形印刻文2個が加えられる。括れ部直下に横位の結節回転文を施し、胴部中央には縄文地(LR)に対向した弧線と山形の沈線文様を交互に配し、文様の要所にはボタン状貼付文が付される。口縁部の装飾から2期に位置づけたが、胴部文様帯の位置が胴部中央と特異で、1期に遡る可能性も否めない。7は口縁部に結節浮線による水平線とジグザグ貼付文、胴上部に結節浮線による水平線と「V」字形の文様が配される。「V」字文は下端が区画されないことから、1期の大きな山形文(図6-15)の痕跡とも受け取れる。9は胴部全面に横位の条線文が施文されるが、口縁部の折り返しが胴部上端まで伸びており、その下縁に半截竹管による刺突が加えられる。折り返し口縁の特徴や胴部から脚台状部への移行が比較的緩やかであることから、2期に位置づけた。11は胴部の丸みを帯びた器形で、頸部に刻み隆起線を巡らし、口縁部は水平と鋸歯状の側面圧痕(LR)を配し、推定6単位の方形で平坦な突起が貼付され、表面に縦の短沈線と側面圧痕(LR)が加えられる。側面圧痕が多用される点と頸部の刻み隆起線、強く膨らんだ胴部の形状から、2期に位置づけた。

長胴形の土器は口縁部・頸部・胴部の三つの文様帯を有する例(14・17～19)、胴部文様帯を欠いた例(13・15)、頸部と胴部文様帯を欠いた例(12・16)の三様が見られる。口縁部が厚く作出され、双頭波状口縁(12・13・15～17・19・20)が発達するが、その間に挟まって縦長の粘土紐が数本並列し、沈線も加えられる(12・13・17・20)。同様の貼付文は平縁の長胴形(14)にも見られ、球胴形(3・26)とも共通する。口縁部の文様は突起直下に凹円や短沈線が加えられ(15・18・19・20)、



大木6式2期の土器

図8 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉の土器 (2)

幅狭の口縁部文様帯には太い凹線が巡らされる(12・18)。また小梁川遺跡の長胴形には、隆起線の中央に沿って捺糸圧痕を加えた土器が認められない。同手法は山形県内陸部や福島県会津地方に顕著に見られており(今村2006c:51頁)、地域的な差異が指摘される。

頸部文様帯は刻み隆起線を持つもの(14)は少なく、半截竹管による平行線や波状の束(14・15・19)が見られ、13は括れ部に刺突を加えた隆起線が巡らされる。胴部文様帯は斜格子やX字形の交点を縦や横に直線の束や波線で結ぶもの(14・17・18)が現れる。19は縄文地(LR)に半截竹管による交叉文が施文される。胴部における沈線の交叉は大木6式の最も初期に多く見られる文様であり(今村2006c:40頁)、1期への位置づけも考えられるが、口縁部が双頭波状口縁であることから2期に位置づけた。また頸部や胴部の文様の基点や交点にボタン状貼付文が認められ、小粒の場合は3個一組、大粒は単独で貼付される(14・17・18)。なおボタン状貼付文は4期の長胴形(図10-8)まで見られるが、その初現は球胴形に類した1期の土器(図4-10)に求められる。18については、凹円を基調とした文様とその直下の橋状把手風の突起(孔は未完貫)から、3期に位置づけられる可能性も否めない。しかし口縁部の波頂間の凹線の間が縦の沈線で区切れ、縦の貼付で区切る2期の特徴(今村2006c:49頁)に類似しており、またCP86区7層で球胴形の1・7と共伴したことから、2期に位置づけた。

(4) 小梁川遺跡出土の大木6式3期

小梁川遺跡では第I群土器として報告されており、球胴形と長胴形の土器で構成され、「浮線文系球胴形土器」が最も発達する。図9-1・8~10・13・14の6点は今村氏が大木6式3期として図示した球胴形と長胴形の土器である。遺構では北西群の楕円形の土坑(口径210×155cm、深さ72cm)である400号土坑(図9-10・12)が当該期の遺構となっており、東側遺物包含層からも多数の土器が出土しているが、良好なまとまりは指摘できない。

浮線文系球胴形土器は胴部が丸く膨らみ、球胴部から台状部へ直角に近く折れ曲がる器形で、口縁部の幅が広がりその上の文様が発達し、胴部文様帯の幅も広がりが見られ、下限は胴径最大部付近に達するものが多くなる

(今村2006c:59頁)。文様は主に結節浮線文(4・19)が展開するが、小梁川遺跡では沈線文が卓越する(1~3・5)。口縁部は平縁が目立ち、口唇上に突起を配した例(4)も見られ、口縁部には先行型式より複雑な文様を加えられる。胴上部の文様は下限が水平に区画され、縄文地(LR)に渦巻文様を主体に斜線や弧線で横に繋いだ構図で、余白部にはジグザグや半円の図形が挿入される。但し1は縄文の地文を持たず、3・4は区画線に接した半円の重弧文が基調となる。1の口縁部は沈線による同心円とそれを囲む三角文を充填した台形区画を基調として、縦沈線と重弧文が交互に配され、19は結節浮線による大振りの山形文となるが、頂点は胴上部の反転部に対応する。7は肥厚した口縁部に凹円と斜位の短沈線を交互に配するが、頸部が強く括れており、球胴形の可能性が考えられる。6は円弧状突起直下の同心円を基調に縦と横の平行沈線を交互に配している。

長胴形の土器は口縁部・頸部・胴部の三つ文様帯を有する例(9・11・13)、その内胴部文様帯を欠いた例(8・10・14~16)、頸部と胴部文様帯を欠いた例(17)の三様が見られる。口縁部は次第に厚みを減じ幅広となり、その上に中太の沈線で複雑化した文様を加えたものが増え(今村2006c:49頁)、平縁と波状口縁が存するが、後者には双頭波状口縁(8・10・17)も見られる。口縁部の文様は円形貼付文や凹円・同心円・渦巻・半円文を基調として、弧線や斜線で横に繋いだ構図が多く見られるが、2期では波頂間を凹線が巡り、中間が縦の貼付で区切られるのに対し、3期では中間に副次的な文様を配して二重の斜線で囲んだ構図(9・11・13~15・18)が目立ち、中間で文様が反転する例(17)も見られる。また口縁部下端に橋状把手を配した例(11・13)が現出するが、同把手は4期(図4-17)に継承され、5期の球胴形(図10-23・24・26)で発達する。

頸部文様帯は簡略化の傾向にあるが、刻み隆起線(11・13)と沈線文(9・10・16・20・23~27)は継続する。隆起線のないものでは頸部文様帯としての独立性が薄れつつあり、胴部文様帯上端との区別が困難な例(9・23・26・27)も見られ、刻み隆起線から刺突列に変化した例(14・15)も存する。また平行線の束になったものが大半を占め、波状の束はほぼ姿を消す。

胴部文様帯は縦の平行線や縦のジグザグ線が優先して

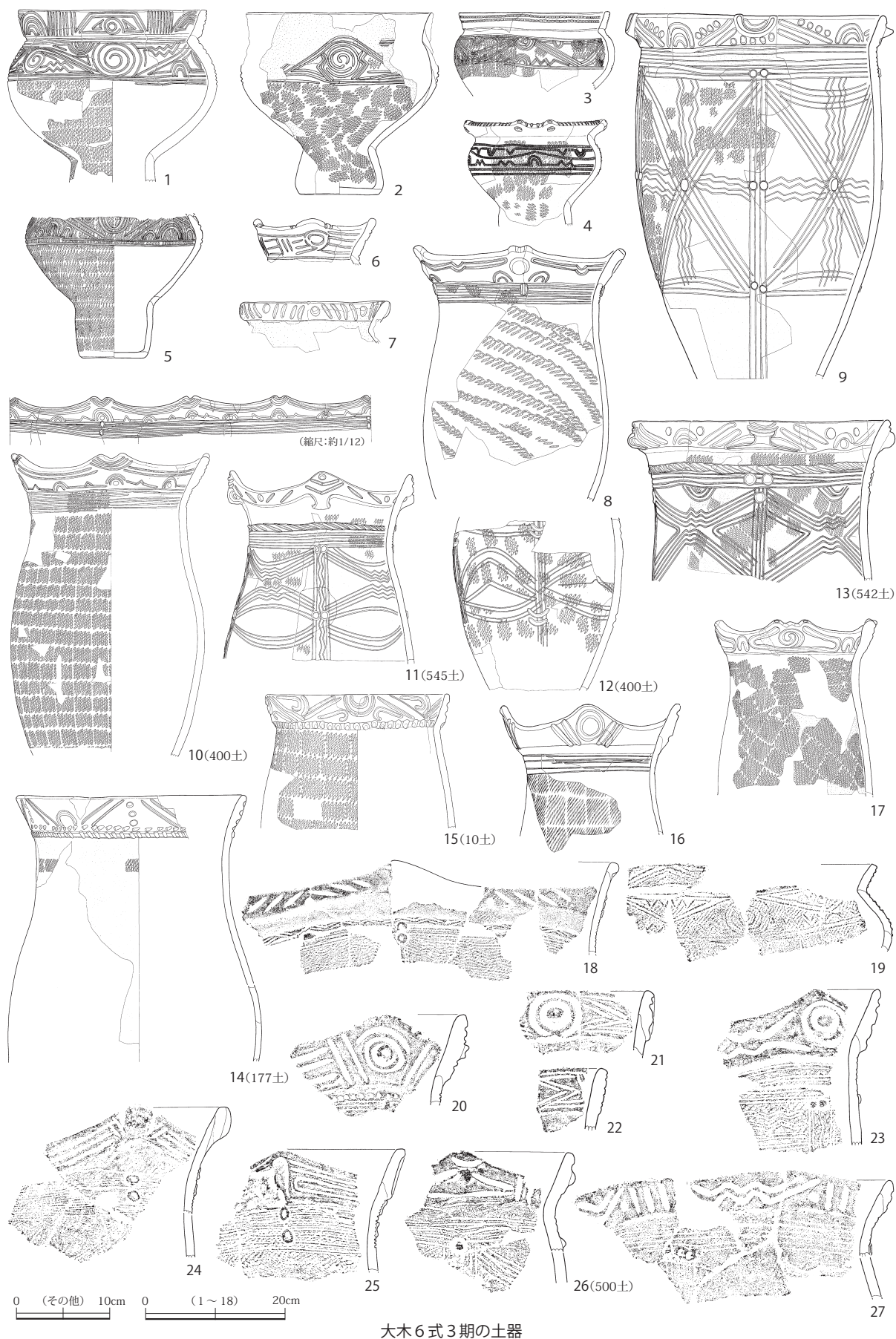


図9 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉の土器(3)

器面を先に分割し、その間を弧線や截頭山形で結ぶのが通例で、截頭山形文の頭もジグザグになるもの(11・13)が多く、弧線の上に太い弧状沈線(稀に隆起線)を加えるもの(12)が特徴的に見られ、4期に続く(今村2006c:50頁)。文様の要所や交点にボタン状貼付文が付されるが、2個一組の例が多く見られる。また胴部文様帯を省略した土器には、結節回転文(8)や羽状縄文(25)等の装飾的な縄文の萌芽が現れる。

(5) 小梁川遺跡出土の大木6式4期

小梁川遺跡では第I群土器として報告されており、球胴形と長胴形の土器で構成される。図10-1・2・7・8は、今村氏が大木6式4期として図示した球胴形と長胴形の土器である。東側遺物包含層や遺構に有意なまともは指摘できないが、北東群のフラスコ状土坑である612号土坑(図4下段)は当該期に帰属される。

球胴形は外折した口縁部が内彎気味に立ち上がり、平縁が多数を占めるが、口唇が内外に突出した断面を有するものが多く、口唇上に矩形や渦巻状の突起(1・3・22)が配される。球胴部はやや縮まり、胴径が口縁より少し小さくなると共に、それまで直角に近く折れ曲がっていた脚台部とのつながりが滑らかになる(今村2006c:55頁)。口縁部の文様はソーメン状浮線文と結節浮線文が併用され、ジグザグ文は短い浮線の端と端を重ねた「端重ねジグザグ」が特徴となり、円形・渦巻状の突起(4・5・10・11)や橋状把手に類似した貼付文を配した例(6)も認められる。胴部文様帯は上下幅が収縮しており、先行型式の渦巻文様を基調とし横位に繋いだ構図から渦巻文様が欠落し簡略化の方向にあり、帯をなさない懸垂文(1・22)や縄文施文のみの例(5)も見られる。懸垂文の場合、括れ部突起の下縁を沈線や浮線で縁取る例(1・14)が特徴的で、突起が消失しても半円形に突出した懸垂文として後続型式(図5-2、図10-26・28)に継承される。

2は口縁部に「ト」字状の平坦な貼付文とソーメン状浮線文による菱形等の幾何学文様、胴上部は渦巻文とそれ等を囲う「W」字状のソーメン状浮線文で構成され、浮線文の両側縁や貼付文の縁辺に半截竹管による刺突列が加えられる。3は口唇上に渦巻突起と半截竹管による縦位の沈線を配し、胴上部に鋸歯状と背向した弧状または三角形の結節浮線文が展開する。5は口縁部から胴上端

にかけて沈線による縦のジグザグ文が繰り返され、その下部は縦方向の装飾的な縄文(LR結束斜行縄文)となる。

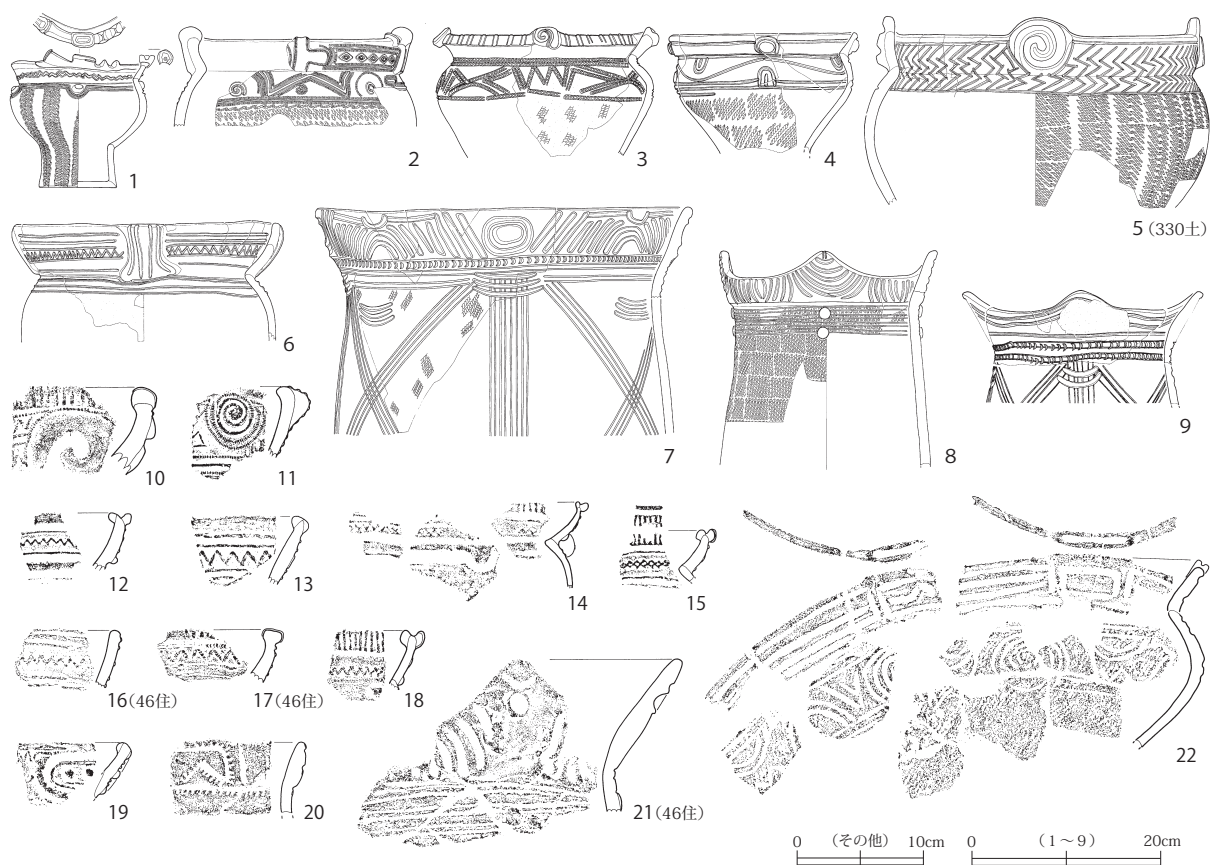
長胴形では、口縁部の円文を囲むように縦の弧を繰り返す文様(8・21)が特徴的で、斜線を繰り返すもの(7)もあり、球胴形にも「く」字形が同じように用いられる(5)。口縁部上端に初めは口唇に沿う沈線がない(7・8・21)が、やがて口唇直下を沈線が巡るもの(図4-17)が現れ、文様帯上限の区画となる(今村2006c:49頁)。頸部文様帯は半截竹管の横線のみで、波状文の束は認められず、先行型式まで見られた刻み隆起線も竹管外面による押し引き文に変化する(7・9)。胴部に文様帯を有する土器は少なくなるが、文様は沈線を縦方向に引く傾向が強く、その間をつなぐ横線はほとんど見られなくなる(今村2006c:50頁)。また3期に引き続き太沈線で加えられた弧(7・9)が認められ、半截竹管による縦線が多条化する傾向が指摘される。

福島県の会津地方では3期に長胴形の深鉢形土器が姿を消し、括れを持たない円筒形の深鉢形土器で占められている(小林2016)。しかし小梁川遺跡では胴部の文様を持つ長胴形が多く出土しており、宮城県北半との関係の強さを窺わせる一方、会津方面に特徴的な沈線の側縁に刺突列を加えた土器も僅かながら出土している(20)。

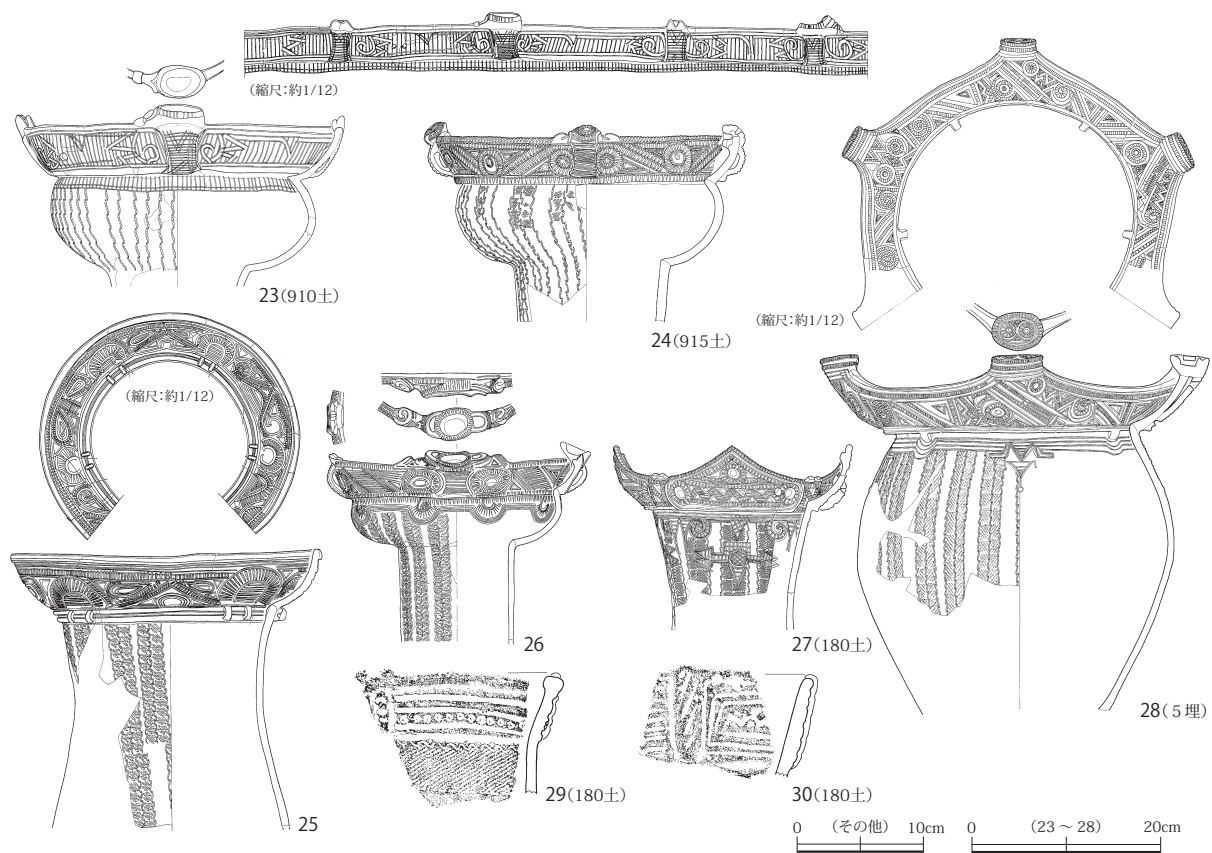
(6) 小梁川遺跡出土の大木6式5期

小梁川遺跡では大木6式5期相当の土器が中期初頭の第II群土器として報告されている。東側遺物包含層では南側のみ第IV層が検出されており、前後の型式を含むがCL73区5層(第IV層)にまとまっている(図10-14・25・26、図11-11)。遺構では南東群のフラスコ状土坑である162号土坑(図5上段)が一括性の高い内容となっており、南西群のフラスコ状土坑の180号土坑も同様である(図10-27・29・30)。また図10-23は北西群と南西群の境界にある小規模な910号土坑(口径47×42cm、深さ43cm)、24は北東群と南東群の境界の中央寄りにある不整形の915号土坑(口径80×60cm、深さ4cm)から出土しており、28は南東群の5号埋設土器である。23~28は今村氏が大木6式5期として図示した土器に該当する(今村2006c・2010)。

大木6式5期は長胴形と球胴形の文様の区別がなくなるが、胴部が球状に膨らんだ23・24・26は後者の系譜を引くもので、脚台部が高く太くなる。25・27は外反り



大木6式4期の土器



大木6式5期の土器

図10 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉の土器(4)

気味の円筒形の胴部、28は内彎する長胴部の上に、内彎する口縁部がついた器形となる。口唇の断面形は内側で階段のように1段低い位置から突出しており、口唇上に環状や渦巻状の突起(23・24・26・28)が配され、また突起直下に大きな橋状把手(24・26)が用いられる。口縁部にはドーナツ形貼付文に刻みを入れた文様(27・28)や、平行した浮線文の間を短い浮線文で梯子形に繋いだ文様が特徴的に現れるが、5期ではドーナツ形の文様部分が独立的多い。なお24～26の口縁部はきちんとした沈線文で表現されている。括れ部の直上、口縁部文様帯の下限をわずかな隆起線で画する例(24・25・27・28)が多く、括れ部には小さな橋状突起も見られる(25・28)。胴部文様を持つ土器は少なく、縦位の結束回転文が施され中期に続くが、括れ部直下に幅狭の文様帯を持つ例(23・26・28)も散見され、粘土紐を「Y」字状に貼付した懸垂文も現れる(28)。27は胴部が細い粘土紐の梯子状貼付文による円形・「V」字状・「W」字状・渦巻等の文様を組み合わせた懸垂文と、縦位の羽状縄文・結節回転文で構成される。なお23の口縁部は半截竹管を施文具として縦の平行線が密接して加えられるが、この手法は前述したように中部高地の松原式との関連が推定される。

上記した装飾土器の他に、「糠塚系統」と称される在地色の強い土器も出土している。口縁部を水平線で数段に区分し括れを持つ器形で、縦の粘土紐と水平線を交互に配し、水平線の間は縦の沈線や刺突が挿入される。後続型式に盛行するが、29・30が出土した180号土坑や162号土坑(図5上段)の成果から、当該期に出現していたことが明らかである。また162号土坑出土の木目状擦糸文の土器(図5-3)から、円筒下層d式との年代的な接点が指摘されよう。

(7) 小梁川遺跡出土の中期初頭の土器

五領ヶ台I a式と同I b式並行期の土器で、小梁川遺跡では大木6式5期と同様に第II群土器として報告されている。東側遺物包含層では南側のみ第IV層が検出されており、CM72区6層上面(第IV層上面)にまとまっており(図11-1・4・12)、遺構では北西群の37号住居跡(図5下段)と南西群のフラスコ状土坑である547号土坑(図5中段)が一括性の高い内容となっており、大型竪穴住居跡の46号住居跡にも認められる(図11-

3・9・13)。東北地方では五領ヶ台I a式と同I b式並行期の区分が困難であることが指摘されているが、図11-3・15が「五領ヶ台I a式並行期」(今村2010:392頁)、4・10～12が「五領ヶ台I式並行期(おらくI b式並行)」(今村2010:393頁)に位置づけられている。内彎する口縁部を乗せた器形で、胴部が内彎する長胴形(1・3)と球胴部分が収縮し台状部が太く高くなった球胴形の器形(6・7)が存するが、括れを持たない円筒形(2・4・12・13)は、口縁部の文様が簡略化しており、後出的様相と言えるであろう。

文様は口縁部に集約され、先行型式で多用された浮線文による表現を沈線文に置き換えたのが五領ヶ台I a式並行期で、短沈線を並べた梯子形の文様図形が特徴となる。渦巻形やドーナツ形の図形は比較的太い沈線で描出した後に短沈線を充填するが、円形の図形は周囲の文様の中に埋め込まれ、渦巻きの端が斜めタスキに流れ込む傾向が指摘される(15)。三角形印刻文も多用されるが、文様図形の余白部の削り取りであった形で刻まれるもの(1・8・17・18)の他に、沈線に沿って機械的に並べたもの(4・10・11・19)も現れる。口唇外側を厚くし、縦線を刻むものが増え、口縁部文様帯の上下端を結ぶように「C」字状(1)や「逆U」字状(2)、渦巻状(12)の突起を配したり、橋状把手(6・8・19)やそれに類した突起(9・13)も認められる。24は曲線的な隆起線を組み合わせて楕円形や三角形の区画を作出し、区画内に三角形の沈線文様を充填する。また括れ部に隆帯を巡らし、その下端に三角形印刻文を連続的に加えた例(1・3・6)が存するが、円筒形の口縁部文様帯下端(12)にも同様の隆帯が認められる。

胴部には縦位の羽状縄文や結節回転文が施されるが、文様を有する例も見られる。3は長胴部に縦位・渦巻状の隆起線と縦位・斜位の沈線文によって複雑な文様を描出するが、区画に沿って短沈線が連続的に充填され、三角形や紡錘形の無文部と区別される。7は球胴部上半に下方に突出した懸垂文、その下端に縦位の羽状縄文(結束第2種)・結節回転文が施されるが、懸垂文は短沈線が充填され、突出部には三角形区画が作出される。

今村氏が指摘した土器以外では、1・6・14は五領ヶ台I a式並行期、2・9・13・22は五領ヶ台I b式並行期に相当するであろう。後者では円筒形の器形が卓越し、

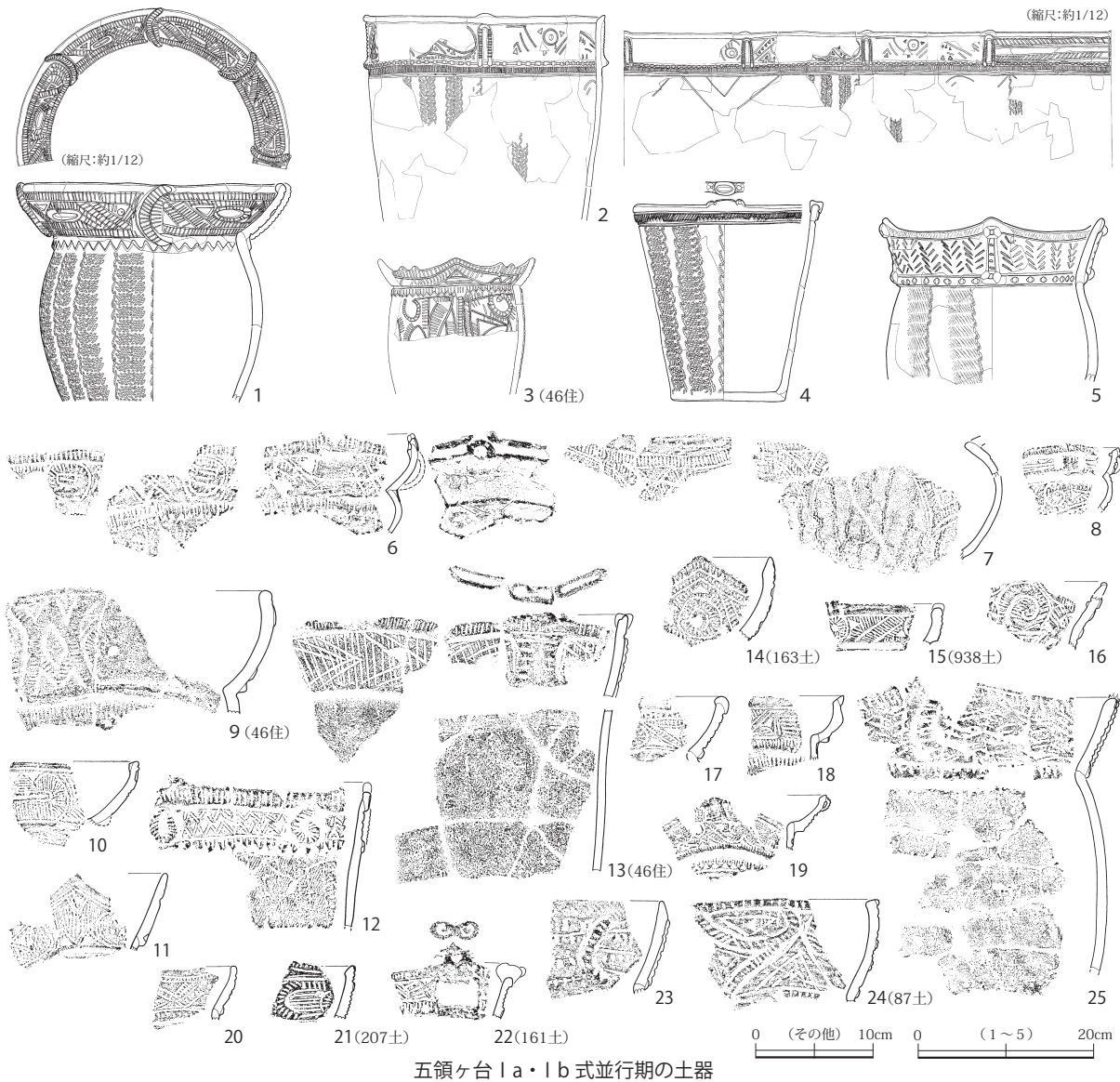


図 11 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の縄文時代中期初頭の土器

口唇上の環状・渦巻状の突起や橋状把手の簡略化が見られ、口縁には密接平行したジグザグ文が多用される。

先行型式に出現した「糠塚系統」には、「C」字状の貼付文(23・25)や、口縁部の水平線の他に、「ハ」字状の短沈線(5)や密接平行するジグザグ文(25)も現れる。「C」字状の貼付文は装飾土器(1)の変化と同一歩調をとり、同時性を示すものと考えられる。また547号土坑の成果から、当該期に「下小野系粗製土器」に類似した土器(図5-28・38~42)が伴う可能性も指摘される。

(8) 小梁川遺跡出土の異系統土器

小梁川遺跡からは、関東地方の十三菩提式に関する土器が出土している(図12)。実測図資料4点と破片資

料11点(推定6個体分)を抽出したが、2~4は今村啓爾氏が十三菩提式の「鍋屋町系土器」として取り上げた土器である(今村2006d:127-130頁)。

1は東側遺物包含層CQ86区1層(第V'層)から出土した。胴部から口縁部にかけて直線的に外傾した器形で、口縁部は4単位の大波状を呈し、凸帯状に肥厚し、波頂部に橋状把手が配される。胴部上半には渦巻と弧状の沈線文様が施され、沈線に沿って三角形印刻文が連続的に加えられる。胴部下半を欠き全体の形状は判然としないが、底部近くが縮約し再び開く器形と推定され、中部高地に盛行した「トロフィー形土器」との関連が想起される。高い波状口縁と大きな渦巻文、折り返し状の肥厚した口縁は、「十三菩提式(諸磯c系統)古段階前半」の

特徴であり（今村 2001:43-45 頁）、大木6式1期頃の搬入品と位置づけられる。但し前述したように小梁川遺跡には同1期の土器が極めて少ない状況にあり、十三菩提式古段階に対応する大木6式1～2期の時間幅で捉える必要がある。なお高い波状口縁と沈線に沿った鋸歯状の文様を持つ類似の土器は、千葉県白井市河原^{かわらごだい}子台遺跡で出土しているが、同例の胴部文様は横位の入組連弧文で構成され、波頂部には縦長の瘤状突起が貼付される（近江 2014）。

2は東側遺物包含層CL74区6層と南西群の222号土坑等から出土した。円筒形の胴下部とその上の外反した胴上部に分かれ、更にその上に内折した口縁部が乗った器形で、口唇上に低平な円弧状突起が4単位貼付され、突起間の口縁部には2個セットの縦位の刻みと横位の凹線が交互に加えられる。口縁部直下と括れ部には太めの押捺隆起線が貼り付けられ、縦位の円形刺突列が一部に認められる。胴下部は密接した結節沈線文による3単位の渦巻文と三角形文で構成され、渦巻文の余白部分は削り取られている。また三角形文の構図は弧線と直線で差異が存しており、中間の横帯や等辺部分の帯状区画に三角形印刻文が交互に加えられ、複合鋸歯文の様相を呈する。今村氏は同例を「中部高地や関東の十三菩提式中段階にともなう鍋屋町系であることは一見して明らかであり、その正確な作りは搬入品の可能性を示す。」（今村 2006d:127 頁）と解説しており、大木6式3期に伴った公算が高いと判断される。

3は東側遺物包含層CQ88区7層上面から出土した。頸部が緩い「く」字状に括れ、口縁部が内彎気味に外傾した器形で、口唇部は刻まれ小波状口縁をなし、括れ部には太い隆起線が巡らされ、三角形印刻文が交互に加えられる。胴上部は2～3本の太沈線で8個の三角形区画が作出され、その底辺部に半円や渦巻の文様を埋め込み、沈線の両側縁または一方の側縁に爪形の刺突列が加えられる。胴下部も上部の三角形の頂点に対応して1～2本の太沈線で同様の区画が描出され、器面全体が三角形を上下左右に連続させた鱗文風の構図となり、底辺部には半円文が配置される。今村氏は同例を「V字形の分割部の中に半円や渦巻きを充填するのは、大木6式の基本的文様図形のひとつであるから、鍋屋町系の文様を大木6式流に解釈しているといつてよい。」と解説している（今

村 2006d:127 頁）。太沈線の側縁に爪形の刺突列を加えた装飾手法は、福島県会津地方の大木6式3～4期に特徴的に見られることから（小林 2016）、年代的な対応関係が暗示される。

4は東側遺物包含層CM83区5層上面から出土した。頸部が「く」字状に強く屈曲し胴部が円筒形の器形で、胴部上半は縄文地（LR）に結節沈線文による渦巻文と斜線、鋸歯状の文様で構成され、結節沈線文の側縁に三角形印刻文が部分的に加えられる。今村氏は同例を「器形は関東の鍋屋町系でありながら、いろいろと大木6式の影響が感じられる土器である。」（今村 2006d:129 頁）と解説しており、大木6式3期浮線文系球胴形土器の文様との関連が想定される。

5～13は縄文地に結節浮線文を有する土器で、「十三菩提式北白川系」に関連した土器と推察され、13のみLR、その他はRLを地文とする（14は不明）。5～9が同一個体、10と11も文様の類似性から同一の可能性があり、5～9/10・11/12/13/14/15の6個体分と思われる。今村氏は十三菩提式の北白川系の特徴として、以下8点を指摘している（今村 2001:54-55 頁）。

1. キャリパー形器形。
2. 先の尖る波状口縁（ただし諸磯c式のように高くない）。
3. 縄文地上の結節浮線文（北白川下層式では特殊凸帯文と呼ぶ、これは粘土が両側にはみ出したようになるのが普通）。
4. ゆったりと間隔をとって加えられる結節浮線文。
5. 同心円モチーフ（渦巻でない）。
6. 口縁内側の縄文帯や結節浮線文。
7. 口縁に縦に平行して加えられる短い結節浮線文。
8. 結節浮線文を構成する文様が単純。

図12-6・12・13は内彎した截頭波状の口縁を乗せたキャリパー形で、6と13は内面にも結節浮線文が施される。先の尖る波状口縁でなく、波頂部直下に同心円モチーフを持たないなど、今村氏の指摘に合致しない点も存するが、縄文地に結節浮線文を施したキャリパー形の特徴は在り土系土器には見出せず、十三菩提式北白川系との関係が強いと判断され、また口縁部の截頭波状の形状は北陸地方の真脇式との近似性も窺われる。10・11

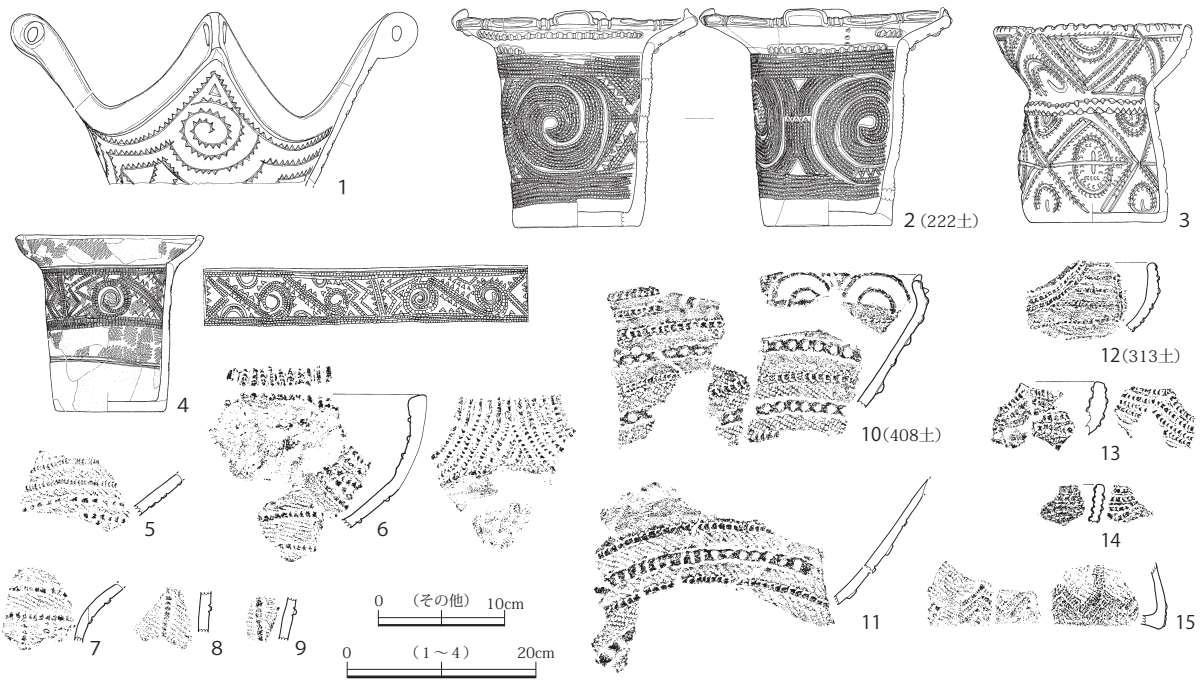


図12 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉の異系統土器

は外反した胴上部の上に内折した口縁部が乗った器形で、2に比して胴上部の占める割合が増している。縄文地（RL）に結節浮線文と太めの押捺隆起線が水平に間隔をとって巡らされるが、10の口縁部の半円形の貼付文は十三菩提式（鍋屋町系）中段階の口唇部貼付文との関連を想起させる。北白川系の成立は十三菩提式中段階と見られることから、これ等の土器は年代的に大木6式3期に対応するであろう。なお11は胎土に金雲母を多く含むことが報告されている。底部資料の15は底面が外に張り出し、弱い上げ底となる形状で、胴部下端に沿って3列の密接したジグザグの結節浮線文が巡らされる。胴下部には縄文地（RL）にジグザグの頂点に対応して縦の結節浮線文が貼付されることから、5～9の個体に類似した土器と考えられる。

1～4は基本的に関東から北上したものと考えられ、1は年代的に十三菩提式古段階（大木6式1～2期）、2～4は十三菩提式中段階（大木6式3期）頃に相当する。1・2が搬入品と見られるのに対し、3・4は文様の崩れ等から遺跡周辺で作られたと理解されている。今村氏は後者の土器に対し、「関東からの移住者が遠方で関東本来の土器作りや約束ごとを忘れかけながら作ったと判断するのが妥当」であり、「本場から遠く離れた東北地方に移住した孤独な土器の作り手は作り分けの約束を忘れ、自

分が保持する2つの系統を完全に折衷した土器を作ってしまったのであろう。」（今村2006d：130-131頁）と指摘しており、関東の土器作りの系統を担った作り手が、大木6式期の小梁川遺跡の集落の片隅で暮らしていた情景が描写されている。破片資料の5～15は縄文地に結節浮線文を持った異質の土器で、北白川系の十三菩提式として抽出したが、鍋屋町系（2～4）と共存したと考えられる。中部・関東では両系統が十三菩提式中段階の普遍的な組み合わせになっており（今村2001：58頁）、大木6式3期の内陸部を通じた広域的な交流関係の在り方を指示したものと考えられる。

6 結 語

本稿では、宮城県南西端に位置する小梁川遺跡から出土した大木6式とその前後の土器型式について考察してきた。編年的位置が明確な土器のみを取り上げ、筆者の理解の及ばない資料は割愛したため、資料に対するバイアスは否めない。しかし同遺跡では大木6式1期～中期初頭（五領ヶ台Ⅰb式並行期）までの連綿とした変遷過程が観察された。それ以降も集落としては継続したが、冒頭で触れたように今村啓爾氏は五領ヶ台Ⅱ式並行期に一旦衰退して、続く大木7a式の竹ノ下式並行期に復活を遂げ、中期社会としての安定期を迎えたことを指摘し

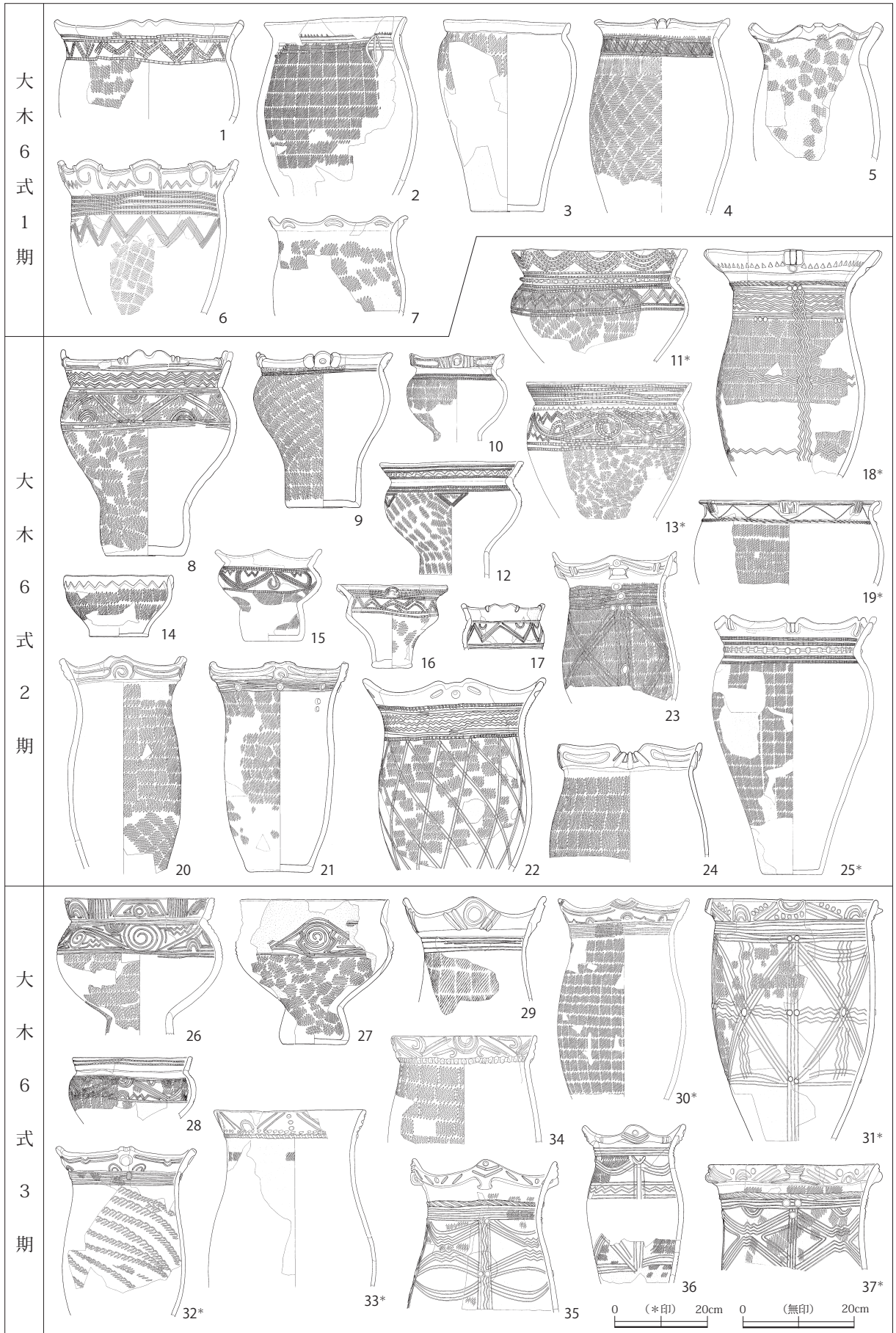


図 13 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡における縄文時代前期末葉土器変遷図 (1)

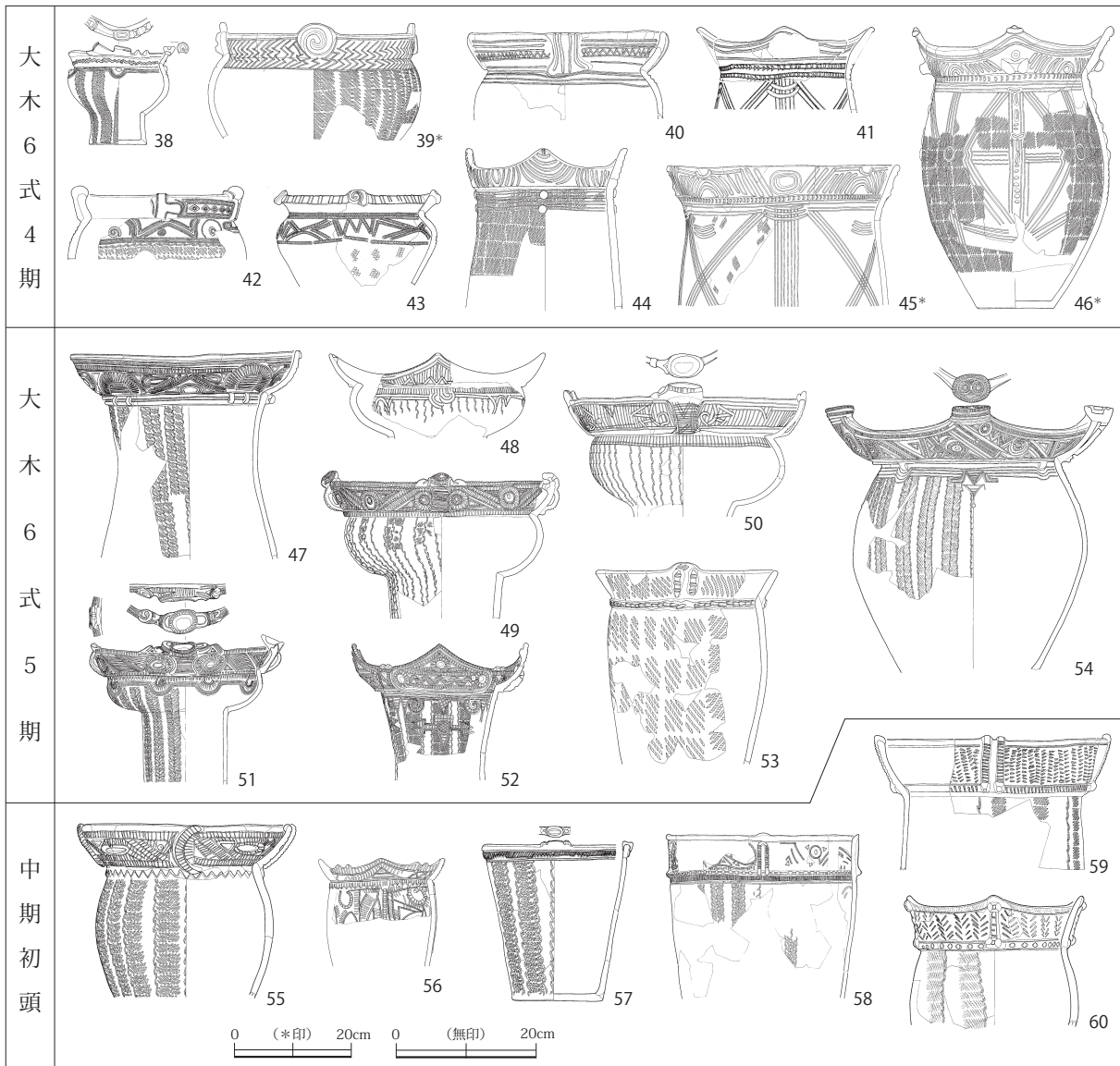


図14 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡における縄文時代前期末葉土器変遷図(2)

ており(今村 2010:464-465 頁)、曲折を経て阿武隈川水系を代表する中期集落に発展したものと推測される。

小梁川遺跡の中期の集落形成は、前期末葉の大木6式1期に開始された。その直前の大木5b式の土器は殆ど見せず、大木5a式からの継続性は認められない。従って大木6式1期に忽然と始まったが、同期の内容は判然とせず、本格化したのは同2期以降であろう。遺構のまとまりが4ヶ所に分散して観察されたことから、当初より環状構成を企図していた可能性も考えられる。しかし当該期の居住施設は明確でなく、貯蔵や埋葬に関連した施設と捨て場跡から構成されており、集落としては不完全であったと言わなければならない。捨て場跡の形成は祭祀・儀礼と結び付いた意図的な遺棄の結果を示しており、長期間にわたって同一地点に遺物の投棄が繰り返さ

れていたと考えられる。従って未検出ではあるが、何らかの居住施設は存していたのであろう。中期初頭になると、集落の中心に長軸線に向けた大型竪穴住居跡が捨て場の近くに構築された。大型の住居を環状に配置した構成は、岩手県南部を中心とした地域の前期中葉～後葉に発生したことから、その影響が当地に波及した可能性も考えられる。周囲には貯蔵施設であるフラスコ状土坑が多数形成されており、大型住居跡が単に居住のためだけの施設ではなく、植物性食物の調理・加工に関わっていた可能性も推定される。

本稿では膨大な縄文土器を出土した小梁川遺跡の資料から、大木6式土器のみを抽出して検討を加えてきたが、その変遷過程を一覧にしたのが図13・14である。東北中部と南部の境界に位置する地理的な特性を反映してか、

その前半期は当該期の中心地であった北上川下流域との関連を示す一方、福島県の会津方面との関係は希薄であった可能性を推定した。また大木6式中段階の3期では異系統土器の様相から、今村氏が描写した関東方面との交流関係の在り方を追認してきた。そして大木6式新段階(4・5期)から五領ヶ台I式並行期にかけては、関東方面と共通した土器の内容から、広域的な土器情報の共有と人的交流が維持されていた一方、「糠塚系統」の土器に見られる在り色の強い土器が組成することを明確にしてきた。

本稿は一つの遺跡の限られた時間幅での変遷を示したに過ぎないが、詳細な編年研究に基づいた地域間交流の実態の解明を目しており、そのための基礎的資料の提示に努めたことになろう。今後当該期の中心域である宮城県北部や岩手県南部の遺跡との比較検討が求められる。また隣接した山形県内の遺跡との対比も必須の課題であろう。土器型式研究は時間軸の設定のみに留まらず、空間的な分析においても有効な研究指標であることは言をまたない。本稿は縄文前期末葉～中期初頭の土器にその可能性を見出すことを試みたもので、地域社会の理解を深化させるには、このような地道な作業を積み重ねることが肝要であると考えている。

註

- 1) 本稿における東北地方の地域区分は、以下の通りである(図1)。「東北中部」は北緯40度以南(厳密には北緯39度45分付近の秋田市・盛岡市・宮古市を結んだラインよりも南側)から山形・宮城の両県にかけた地域が該当する。また「東北南部」は山形・宮城県と新潟・福島県の境界を結んだラインよりも以南の地域で、福島県全域と新潟県北半(阿賀野川以北)が含まれる。宮城県の阿武隈川下流域と山形県の最上川上流域(置賜地方)は、東北中部と南部の接触地域に当たるが、後者に含まれる公算が高いように思われる。従って「東北中・南部」は岩手県南半と秋田県南半、宮城県、山形県、福島県、新潟県北半が該当し、縄文時代前・中期には大木式土器分布圏が形成されていた地域である。それに対し「東北北部」は北緯40度以北の地域が該当し、円筒式土器分布圏が形成されていた。なお今村啓爾氏は、大木6式土器圏を北部(岩手県・宮城北部)と南部(宮城県南部・山形県・福島県)に区分しているが、前者が筆者の東北中部、後者が東北南部にほぼ相当するよう思われる。
- 2) 大木式土器分布圏である東北中・南部の縄文時代前期編年では、前期初頭が上川名Ⅱ式、前期前葉が大木1式、前期中葉が大木2a・2b式、前期後葉が大木3～5式、前期末葉が大木6式に相当する。中期については、中期初頭が大木7a式、前期中葉が大木7b式、前期中葉が大木8a・8b式、前期中葉が大木9式、前期末葉が大木10式を指示しており、勝坂式を前期中葉とする関東の編年区分とは差異が存在する。
- 3) 板沢地区(図3)の方形の竪穴住居跡10棟(南東群8棟、

北西群2棟)は、いずれも縄文前期前葉に帰属され、環状の集落構成には関連しない。

- 4) 括れ部直下の隆起線下縁に三角形印刻文を連続的に加えた土器は、福島県法正尻遺跡の西向き斜面部から出土した大木6式古段階(大木6式2期)に指摘されたており(小林2016)、図4-18、図8-23・24を2期に位置づける理由の一つであった。しかし中期初頭五領ヶ台I式並行期にも類似した特徴が認められている(図11-1・3・6)。
- 5) 長胴形の図8-16の口縁部には、渦巻文が認められる。同例は大木6式3期の可能性もあるが、4単位の渦巻文の間に挿入された矩形区画が中間で区切られていないため、2期に位置づけた。突起間は指頭圧痕状に凹ませた程度で、胴部が単節LRであるが、横位の結節回転文が認められる。

引用文献

- 相原淳一ほか 1986 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 小梁川遺跡—遺物包含層— 原頭遺跡・養源寺遺跡・大熊南遺跡』宮城県文化財調査報告書第117集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第4号 pp.93-157 東京大学文学部考古学研究室
- 今村啓爾 2001 「十三菩提式前半期の系統関係」『土曜考古』第25号 pp.37-66 土曜考古学研究会
- 今村啓爾 2006a 「縄文前期末における北陸集団と土器系統の動き(上)」『考古学雑誌』第90巻第3号 pp.1-43 (pp.181-223) 日本考古学会
- 今村啓爾 2006b 「縄文前期末における北陸集団と土器系統の動き(下)」『考古学雑誌』第90巻第4号 pp.36-51 (pp.296-311) 日本考古学会
- 今村啓爾 2006c 「大木6式土器の諸系統と変遷過程」『東京大学考古学研究室紀要』第20号 pp.37-69 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室
- 今村啓爾 2006d 「縄文土器系統の担い手—関東地方から東北地方に北上した鍋屋町系土器の場合—」『伊勢湾考古』20(山下勝年先生退職記念号) pp.125-132 知多古文化研究会
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』同成社
- 近江 哲 2014 「興津式と、その前後—興津式の細別試論とその問題点—」『型式論の実践的研究Ⅱ』千葉大学大学院人文社会科学系研究科研究プロジェクト報告書第276集(柳澤清一編) pp.73-88 千葉大学大学院人文社会科学系研究科
- 興野義一 1969 「大木式土器理解のために(V)」『月刊考古学ジャーナル』No.32 pp.6-9 ニュー・サイエンス社
- 興野義一 1970 「大木式土器理解のために(VI)」『月刊考古学ジャーナル』No.48 pp.20-22 ニュー・サイエンス社
- 小林圭一 2014 「吹浦遺跡出土の縄文土器—今村啓爾氏の研究に学ぶ山形県内の縄文前期末葉の土器群—」『研究紀要』13 pp.3-51 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 小林圭一 2016 「会津地方の大木6式土器と沼沢火山の噴火」『研究紀要』15 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 佐藤広史・伊藤裕ほか 1988 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 大梁川遺跡・小梁川遺跡(石器編)』宮城県文化財調査報告書第126集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 手塚均・相原淳一ほか 1987 「西林山遺跡」『中ノ内遺跡・本屋敷遺跡他—東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ—』宮城県文化財調査報告書第121集 pp.595-700 宮城県教育委員会・日本道路公団
- 松田光太郎 2003 「大木6式土器の変遷とその地域性—縄文時代前期末葉の東北地方中・南部の土器編年—」『神奈川考古』第39号 pp.1-30 神奈川考古同人会

宮城県教育委員会編 1988 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書付編』宮城県文化財調査報告書第126集 宮城県教育委員会

村田晃一ほか 1987 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第122集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所

図版出典

図1・2:国土地理院発行(1996年3月)「1:500,000地方図(3) 東北」をベースに作成

図3:(村田ほか1987:第6~11図・付図1)をベースに作成

図4-1~23:(村田ほか1987)

図5-1~81:(村田ほか1987)

図6-1・3・7・8・15・16・22・25:(村田ほか1987)、2・4~6・9~14・17~21・23・24:(相原ほか1986)

図7-1~7:(手塚ほか1987)

図8-1・3・5・7・9・11・12・16・18・19・22・24・26・27:(相原ほか1986)、2・4・6・8・10・13~15・17・20・21・23・25:(村田ほか1987)

図9-1~9・16~25・27:(相原ほか1986)、10~15・26:(村田ほか1987)

図10-1・3・4・8~15・18~20・22・25・26:(相原ほか1986)、2・5~7・16・17・21・23・24・27~30:(村田ほか1987)

図11-1・4~8・10~12・16~20・23・25:(相原ほか1986)、2・3・9・13~15・21・22・24:(村田ほか1987)

図12-1~9・11・13・15:(相原ほか1986)、10・12・14:(村田ほか1987)

図13-1~3・6・8・11・13・14・16・18・20・21・25・30・33~37:(村田ほか1987)、4・5・7・9・10・12・15・17・19・22~24・26~29・31・32:(相原ほか1986)

図14-38・41・43・44・47・51・55・57・60:(相原ほか1986)、39・40・42・45・46・48~50・52~54・56・58・59:(村田ほか1987)